

魔術師見習いの暮らし 方

ゲンダカ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある地方都市で暮らす、姉と弟の気ままな日々。

姉はオフィスレディで、弟は現役の大学生。

魔術を学び、それをぼいっと捨てた姉。

魔術を学び、それを受け継ぐと決めた弟。

シリアスなんて一切なし。ただただのんびり暮らすだけ。

現代に生きる、魔術師見習いの日々は、きつと、変わったこともなく。

どこにでもありふれる、ただの日常と変わらない。

TYPE—MOON世界の設定を拝借した、オリジナルキャラによるオリジナルストーリーです。

平穏なまったりとした日々を、文章の練習がてら書き連ねていきます。

完全に見切り発車なので、どう転がるか僕自身わかりませんが、それもまた、面白いのではないでしょうか。

原作を「魔法使いの夜」とさせていただけますけど、正確に言うと「TYPE—MOON」が原作です。

勝手ながら、十二話を以って一旦休載とさせていただきます。

目次

miss
blue!

159

一話 家出娘 | 1

二話 結界 | 23

三話 学友 | 35

四話 蒼崎 | 52

五話 姉 | 64

六話 人形師 | 78

七話 眼鏡 | 88

八話 暗示 | 98

九話 誕生日 | 111

十話 帰省 | 129

十一話 魔法 | 142

十二話 see you again,

一話 家出娘

「ただいま」

がらがらと玄関の引き戸を開け、同居人に声をかける。

居間のふすまから光が漏れていた。ぎしぎしと音を立てながら廊下を進み、戸を開く。

部屋の中央に置かれたちゃぶ台に、姉がぐでつと寄りかかっていた。

「おかえりー。遅かったじゃん」

「うん、バイトが長引いちやっただ」

「そりやおつかれさん」

畳に鞆を置き、ちゃぶ台の傍に敷かれた座布団に座る。テレビが点いていた。

「あれ、そのドラマ、新作？」

「そうなんだけど、おもしろくないや。月九も落ちぶれたもんよね」

「なのに見てるんだ」

ちゃぶ台に置かれた急須を取り、自分の湯のみに注ぐ。ほのかに湯気が立っている。

「だって、こっから面白くなるかもしれないし」

「最近深夜ドラマのほうがおもしろいよ」

「あー、それはあたしも思うわ。低予算だからさ、逆にはちやめちやなことやってるよね」

ちやぶ台で頬杖をつき、ぱりぱりとせんべいを噛み砕きながら喋るOL。

それを眺めながら、緑茶を啜る。やはり、暖かい。僕の帰る時間に合わせて淹れてくれているのだろうか。

「お茶は美味しいねえ」

「せんべいもあるよお」

がさりと、大きな袋をこちらに向ける。

「うん、いただきます」

そこから一枚の煎餅を受け取り、口へ運ぶ。

「月九つて死語らしいよ」

「うっそだあ。職場でもみんな使ってるよ」

「大学じゃ聞かないな」

「まじか。怖えー」

姉弟揃って、煎餅をかじりながら、テレビの三文芝居を眺める。主人公がヒロインらしき女性にプロポーズしていた。

「うわ、展開はやっ」

「最近はこんなもんだぜ、コースケ」

「昔はもつと焦らしてたじゃん」

「昔で、あんた、何歳よ」

「はたち」

「そのトシで昔の何を知ってるっていうのよ」

「二十三歳に言われたくないなあ」

「それもそーか」

「ばりん、ばりん。煎餅をかじる音が響く。

テレビはコマースャルに移った。

「ねえ、コースケ、晩ごはんつくってよ」

「ごろりと仰向けに寝転がり、ぼんぼんとお腹を叩いている。

「ねーちゃん、食べてないの」

「アンタが作ったほうがおいしいじゃない」

「変わんないよ」

「変わるわよお。だーかーら、おねがい」

「しょうがないな」

座布団から立ち上がり、台所へ向かう。

「あ、そういえばさ」

ふすまを開きかけ、ふと思い出したことを姉に尋ねる。

「なんか結界がほつれてるとか言ってたけど、直したの？」

「えー？ あ、あー、わすれてた」

「……………」

「ま、ほつれてるのは視線避けのやつだけだし、だいじょぶでしょ。明日やろ、明日」

「また僕にやらせる気でしょ」

「もちろん。我が家の次の当主サマなんだから」

「はいはい、じゃーご飯作ってくるよ」

ふすまを閉じる。その向こうから声が続く。

「おねーちゃんはラーメンが食べたいなー」

ぎしぎしと廊下を歩き、少し離れた台所へ。

「昨日ので最後だよ。あと残ってるのはカレーくらいかな」

「あ、カレーもいいなあ」

「オツケー」

シンクの下の戸棚を開いて、インスタントカレーの残弾を確認し、米を研ぐ。

水と米とをしゃかしゃかかき混ぜていると、玄関から物音がした。

「んっ？」

「こんこん、こんこん、という音。」

「ノックか。珍しい。来客だ。」

「ねーちゃんはテレビで気づいてないな……仕方ないや」

「ボウルを置き、手を洗ってから玄関へ向かう。」

「はいはい、いま出ます」

「鳴り止まないノックに声をかける。すると、ぴたりと音は止んだ。」

「すりガラス越しに人影はある。居なくなつたわけではない。」

「玄関の明かりを点け、扉のネジ式錠を回し、戸を引く。」

「こんばんはっ」

「へ、っ、こんばんは」

「唐突なその来訪者は、小さな女の子だった。」

「え、えっと、どうしたのかな」

「その女の子は、どこからどうみても小学生である。」

「小さなおさげは三つ編みで、赤いリボンでまとめられていた。そして背中には真っ赤なランドセル。いかにも、な小学生だ。」

「いえで、してきたんです」

「家出？」

「そうです」

「おうちはどこ？」

「あそこです」

そう言つて、彼女は左手で何処かを指差した。

靴を履き、玄関から出て、彼女の指の先を見る。この家の通りと交差した別の通りを指差しているようだった。

「どうして、家出しちゃったの？」

「おとーさんがうるさいの」

「うるさい？」

まさか、虐待か。

「おべんきよーしなさいって、うるさいの。がつこうのしゅくだいやつたら、こんどはおとーさんが作ったもんだいにこたえろー、って」

「なるほど」

真逆だった。なんと教育熱心な父親か。

「お父さん心配してるだろうし、帰ったほうがいいんじゃないかな」

「いやです」

きつぱりと言いつ切る少女。なかなか芯がしつかりしている。

「……参ったな」

このまま追い返してもこの子は家に帰らないだろう。それに、外は今、雨が降っている。傘もささずに歩いていったのか、少女の髪は濡れていた。

「ひとばん、とめてください」

「うお、しつかりしてるな」

「えっへん」

仕方ない。とりあえず、姉に相談しよう。

「じゃあ、とりあえず、上がって」

「わあい、おじやまします」

「コースケ、捕まるぞ」

居間のふすまを開けて早々、辛辣な姉の声が響いた。

「この子の方から来たんだよ。って、話聞いてたでしょ」

居間のテレビは切られていた。大方、聞き耳を立てていたんだろう。

「まーねー。おもしろいじゃん、泊めてあげようよ」

「ありがとうございますっ」

ぐいんとお辞儀する少女。その勢いのままランドセルが開き、中身が散らばった。

「うは、おもしろー」

姉はお腹を抱えて笑っている。

「あわわ」

がさがさと荷物を集める少女。教科書ばかりだったが、お菓子も入っていた。非常食のつもり、だろうか。

「ええと、名前はなんていうのかな」

ひとときを遠くへ飛んでいった、筆箱の中身を集めてあげながら話しかける。

「たにぐち、たえ、さんねんせーですっ」

シヤキン、なんて擬音が付きそうな立派な姿勢で宣言する少女。何かと忙しい子だ。

「たえちゃんかあ。かわいい名前ねえ。よーしよし」

姉はいつの間にか少女の傍に寄り、一心不乱に頭を撫でくりまわしていた。

「きやはは、あはは」

「わははは」

じゃれあう姉と少女。

「うちとけるの、早すぎ……」

少女の代わりに教科書をまとめながらつぶやいた。

「宮本功乃ことのです」

「宮本功介こうすけです」

たえちゃんの荷物を片付け、僕らも自己紹介する。

「きよーだいなの？」

「そーよ。あたしがねーちゃん、あつちのがおとーと」

あぐらをかいた姉の足の上に、たえちゃんが抱え込まれている。お互いにそのポジシヨンが気に入ったらしい。

「ことねーちゃんと、ことにーちゃん」

「うはー、ややこしー」

さつきから姉はたえちゃんの一語一句に大爆笑している。

「僕、コトスケじゃなくて、コースケだよ」

「ことにーちゃんのほうがかわいいよ」

「可愛くなくていいんだけど……」

「か、かわ、かわいいって、コースケ、が、ひやははは」

もう、この姉は役に立たない。

「ことにーちゃん、はらへった」

「へ？」

「ばんごはーん」

さっきの姉と同じように、お腹をぽんぽんと叩いたえちゃん。

「おお、そうだよコースケ。カレーでしょ」

「かれー？」

途端にたえちゃんの目が輝く。

「おお、カレー好き？」

「うん、だいすきつ。あ、でも、からいのはやだ……」

「ねーちゃんもやだぞつ」

「ほんと？ わーいつ」

はしやぐ姉と少女。

「ほれ、なにをしておるコースケ。とつとつ作つてまいれ」

「まいれー、まいれー」

「はいはい……」

複数人の男女が集まるとき、女性のほうが多いと男性の人権は侵害されるという。

ここのケースでも、当てはまるらしかった。

「はい、できたよ。スーパー甘口カレー」

大きな皿を二つと、小さな皿一つをお盆にのせ、居間に入る。

「すーぱー?」

「そう、スーパ―。ねーちゃんが辛いのがダメだから、はちみつがたーつぷり入ってるんだよ」

「むはは」

「威張るところじゃないよ、ねーちゃん」

「ことねーちゃんすごいっ」

「そーだろー」

カレーをちやぶ台に運んでも、たえちゃんは姉の膝から動く気配がない。このまま食べるのか。

「あれ、みつつだけ?」

「うん?」

運ばれたカレーを見て、たえちゃんが不思議そうな顔をする。

「あそこのおとーさんのぶんは?」

などといいながら、和室の隅を指差すたえちゃん。

僕の鞆とたえちゃんランドセルが置かれ、ちょうど隅っこが影になっている。勿論、何も、いない。

「……ねーちゃん、ほつれたのは、人避けの結界だけじゃなかったの」
「あは、は」

どうやら、退魔の結界もほつれていたらしい。

「あー、ゆーれいかあ」

「そう、ゆーれいな。だから、カレーはあげなくていいよね？」

「うんっ」

「……………」

僕はいわゆる靈感というやつはないが、姉には少しだけ靈感があった。このたえちゃんもそうなのか、二人は同じ場所を見ながら話している。

「おら、かえれー」

「そーだ、かえれー」

二人の視線が、部屋の隅から少しずつズレていく。

「ことねーちゃん、あいつ、かえったー」

「やったなー」

頭を抱える。いろんなことがありすぎてついていけない。

「ことにーちゃん。いただきます、するぞ」

ぼんぼんと机をたたいたくたえちゃん。それに急かされ、自分の座布団に座る。

「はいはい……。いただきます」

「いただきますっ」

「いただきますーす」

コーヒーを一口含む。

「あなた、さすがに言いすぎじゃありませんか」

妻の声。

「……………」

ことん、とカップを置く。テーブルには、まだ手のつけられていない夕飯が三人分残っていた。

「そう、だな。強要して、どうなるものでもないか」

「ええ、ええ。あの子の通信簿はいつも良いことばかり書いてあるじゃないですか。今のままでも、十分ですよ」

「……、様子を、見てくる」

椅子を引き、立ち上がる。

「はい、おねがいしますね」

妻に目で返事を返し、二階へと繋がる階段へ向かう。

娘の部屋の前に立ち、灯りが点いていないことに気付いた。ふて寝でもしているのか。

本当に眠っていたら、起こすのは悪い。音を立てないよう、そつとノブを回し、扉を開く。

「……ん？」

無音。あたりまえだ。夜で、電気も点いていないのだから。

だが、寝息すらしなのは、どういうことか。

「たえ？」

ベッドに近寄る。布団の真ん中がもっそりしていることに気づき、そつとその布団をめくる。

「なっ」

八歳の誕生日に買ってやった、キッツイーちゃんの特大ぬいぐるみが横たわっていた。

「た、たえっ。どこだっ」

部屋の明かりをつける。よく部屋を見てみると、あの赤いランドセルがない。

「どうしたんです」

声を聞きつけたのか、妻が二階に上がってきた。

「た、たえが、たえが、いないっ」

「そ、そんな、まさか」

「お、おれが、言い過ぎたばかりに……」

がくん、と膝をつく。

「あなた、落ち込んでいる場合じゃありませんよ。外は雨です」

「いかん、探さないと」

妻の横を通り、玄関へ向かう。

サンダルに足を突っ込み、扉を開いた瞬間、ちょうど青年がチャイムを押すところだった。

「あ、谷口さんのお宅ですか」

「そうですが、用ならあとにしてください。今、ちよつと」

「ええと、その、娘さんのことで、お話が」

「なにつ」

ぎろりと青年の顔を睨む。

「貴様、娘に何を」

「あつ、いえ、ちがつ」

「あなた、落ち着いてください」

後ろから手を掴まれた。

「ぐ、ぬう」

「あの、ええと、娘さんが急にうちに来まして、泊めてくれっていうもんですから、どうしたものかと思ひまして」

ぼりぼりと頭を搔きながら、ぼんやりした調子で青年が言う。

「と、泊め、とめめっ」

「あの、いや、だから」

「落ち着きなさいってば、もう。……あら、あなた、功乃ことのさんのところの?」

「あ、はい、そうです。功乃の弟の功介です」

「あらあ、それなら安心だわあ。あなた、たえは大丈夫よ」

「なんだ、知り合いか」

呼吸を整えながら問う。

「ええ、功乃ちゃんのこととは知ってるわ。このへんで会ったときよくお話してるのよ。立派に一人立ちした社会人で、弟さんと一緒に暮らしてるって話してたわ」

「そうか、お前が、そう、言うなら」

妻の顔と、青年の顔とを交互に見る。

「ごめんなさいね、ええと、こーすけくん、だったわね。一晩だけ、たえのこと、お願いしていいかしら。目が覚めたら、きつとうちに帰りたいがるだろうから」

「ええ、大丈夫ですよ」

「……………頼んだ」

それだけ言つて、玄関から立ち去る。

たえはもう、小学三年生だ。そろそろ、思春期、いや、反抗期のだろうか。

難しい年頃になってくる。職場の同僚のところの娘は中学生らしいが、口も聞いてくれないらしい。たえもそうなってしまうのだろうか。昨年からもう、一緒に風呂に入つてくれなくなった。寝るのも、自分の部屋だ。

「はあ」

妻と青年はまだ何か話している。それを聞かないようにして、またコーヒーに口をつけた。

「ただいま」

本日二度目のセリフを口にし、居間に入る。

「……にーちゃん、どーいってたのー」

「ジュース買ってきたんだよ」

「わあい」

ココアの缶を手渡す。

「ねーちゃん」

「こつそり姉に耳打ちする。」

「一晩だけ、泊めてやってってくれってさ」

「おっけー」

聞くが早いのか、またたえちゃんのもとへと駆け寄る姉。

「よーし、お風呂行こうか、たえちゃん」

「えー、ココアのみたよう」

「お風呂から出た後に飲んだら、もーっとおいしいぞ」

「ほんと？　じゃーそーするっ」

わきやわきやと居間から去って行く二人。

「まったく」

はあ、と溜息をつき、自分用に買ってきた缶コーヒーを開ける。

たえちゃんの家に着いた途端、あの親父さんが扉を開けたときは心底驚いた。正直死ぬんじゃないかと思ったが、とりあえず無事である。

奥さんから長い話を聞かされ、両親ともたえちゃんのことを大事にしているのはよくわかったので安心だ。

「とりあえず、退魔の結界だけでも張り直すかな」

でない、たえちゃんが眠れないかもしれない。

姉曰く、一般的な浮遊霊は、魔術を始めとした神秘によりついてきやすいらしい。この家には僕や姉の魔力が満ちているので、簡易的であれ退魔の結界を張らないと霊が集まってくるのだ。僕はまったく見えないから問題ないのだが、姉は見えるので結構煩わしいらしい。

コーヒーを飲み干し、縁側から外に出て、敷地の隅に術式を刻む。

「……これ、全部張り直したほうがいいんじゃない」

人避け、退魔だけでなく、魔力殺しや探知の結界もぼろぼろだった。

この平屋の一軒家は、宮本家の別荘みたいなものだ。霊地の管理者たる本家は少し遠くがあり、この家は代々修行用に使われてきたらしい。が、それも先々代くらいまでで、五十年くらいは放置されていた、とかなんとか。

それに目をつけた姉が住み込んでしまい、父が「お前もついでに行ってこい」と言い、この平屋のそばにある大学に通うことになった。

それが去年のこと。以来、姉と二人暮らしすることとなった。

傘をさしながら、とりあえず退魔の結界の応急処置を施していく。浴室の傍を通ったとき、大きな笑い声が聞こえた。

「ま、楽しいのは、いいことだよな」

「おせわになりましたっ」

翌朝五時。たえちゃんが目を覚まし、家に帰ると言い出した。

「ふあい……うん、どーもお」

姉が目をこすりながら、玄関でたえちゃんを見送る。

「おうちまで送ろうか、たえちゃん」

「いえっ、だいじょーぶです。すぐそこですから」

「そっか」

たえちゃんの家を目を向ける。すると、その家の扉が開き、奥さんが出てきた。

「あ、たえちゃん、お母さんだよ」

「えっ、あ、ほんとだ。おーい」

ばたばたと手を振る娘に気づいたのか、奥さんがわたわたとうちに近づいてきた。

「迎えに来るみたいだね」

「うんっ。ことねーちゃん、ことにーちゃん、ありがとう」

「どういたしまして」

「きいつけてねえー……」

ほわあ、とあくびをする姉。

「ことねーちゃん、また、遊びに来てもいい？」

「へ？ うん、いつでもきんしゃい」

「わあい」

「よしよし」

寝ぼけたまま、たえちゃんの頭を撫でている。

「ことにーちゃん、カレー、おいしかったよ」

たえちゃんが唐突に僕の方を振り向いた。

「えっ、ああ、ありがとう」

満面の笑みで僕を見る。

夜もよく眠れたらしい。ちよつと苦労した甲斐もあるというものだ。

「功乃さん、ごめんなさいねえ」

奥さんがうちに到着した。

「へあつ、い、いえ、だいじょーぶですよ。たえちゃんもう、帰りたいって」

「うん。ごめんなさい、おかーさん」

「まったく、家出するならするっていいなさいね、こんどからは」

「……………」

それもそれで、どうかと思うのだけれど。

「ばいばい、たえちゃん」

姉がたえちゃんに手を降っている。僕もそれに合わせて手を降った。

「またねー、ことねーちゃん、ことにーちゃん」

母親に手を引かれながら帰っていく少女。

「ことにーちゃんって、だあれ？」

家に帰る奥さんのその言葉だけが、なぜか聞こえた。

二話 結界

梅雨は嫌いです。

私は小さな頃から海辺で暮らしてきたのだけれど、そのおかげでイヤというほど水を見てきました。

潮の匂い、雨の匂い、プールの匂い。水の匂いは、みんな大嫌いです。

そして、忌むべき梅雨が今年もやってきたのです。

「嫌になるわあ」

畳に転がる。これは、じつとりとした空気から少しでも逃れるための秀逸な手段です。けれど、それを弟は「ねーちゃんはやっぱバカだよな」などと、ひどいことを言うのです。

「嫌になるわあ」

「ねーちゃん、三秒間に二回同じ事言ったよ。凄いな」

「うっせー」

うるさい弟に、枕にしていた座布団を放り投げてやりました。

「ぶく」

何やら本を読んでいた弟はそれに気付かず、顔面に座布団を被弾し、仰向けにころんと転がって、大の字になっていきます。

「どーだ、まいったか」

「ぐわー、……こりや、結界、直せないなあー」

「それはこまるっ」

慌てて弟から座布団をどけてやる私。なんと優しい姉でしょう。

「ゲンキンすぎるよ」

そんな私に対して、なんてひどい弟でしょう。

「補修、どこまでできたの？」

「魔力殺し以外は大丈夫だよ」

「以外はって、そこ一番大事じゃない」

だらしなない弟をペしペしと座布団で叩いてやると、なんだかごによごによと弁解の聲が聞こえてきました。

「だって、いろいろ材料も要るし、手間だっつかかるし、雨だし」

「雨かんけーないでしょ」

「あるよう。陣が刻みにくいじゃないか」

「あー、確かに」

「だからしばらくはこの家でも、あんまり魔術は使わないようにね」

「どーせ全然使つてないよ、あたし」

そう言うのと、ふと弟が何かを思い出したような表情をしました。

「そーいやねーちゃんさ、昔ルーンやってなかったっけ」

「え？ うん、高校の頃かな」

懐かしい。あれは高校二年生のころ、クラスで「ルーン占い」が流行っていたときのことでした。

女子高生の好きなモノといえば、いつの時代もイケメンと占いです。私もご多分に漏れずその二つが大好きで、ルーンが流行ったときもその流れに全力で乗っかりました。

そしてルーン文字が魔術にも転用できることを知り、「これはやらねばなるまい」と、独自に鍛錬を始めたのです。

占いに魔術的要素を盛り込んで精度を上げたりするのは序の口で、ありとあらゆる魔術をルーンで行えるようにしました。火をつけたり、凍らせたり、結界を張ったり、あの頃はなんでもかんでもルーンでやっていたっけ。当時好きだった男の子に近寄るべく、こっそりルーン魔術を使ったこともありました。

そんなふうにあつたままにルーンを学べたのには理由があります。我が家の家督は代々男が次ぐのが通例らしく、私の代でも弟が当主になると、既に決まっていたので、私は

好きな様に魔術を研鑽できたのです。

宮本家の魔術特性は「防衛」。ありとあらゆる守護や加護が得意な家系で、ルーンとの相性も、まあ、なかなか悪くなかったのです。

私の作るルーンのお守りは効果絶大だという評判が、学校中に響き渡っていました。

「お守りとか作ってたなあ。コースケにもあげたっけ」

「うん、交通安全のやつ。結局効いたのかわかんないけど、事故はなかったね」

「ま、そんなもんよね。で、ルーンがどうしたの」

「うん、なんか父さんいわく、時計塔でルーンがめっちゃ流行ってるらしいんだ。で、お前もやっつけ、って」

「ほほう」

その話は私も聞いていました。どっかのすごい魔術師がルーンの基礎を作りなおして、他の魔術師もとっつきやすくなったとか。実際、私がルーンを研鑽できたのも、その「どっかのすごい魔術師」さんのおかげだったりします。

「そうかあ、とうとうコースケに魔術を教える日が来たかあ」

「そういえば、ねーちゃんから教わったことはなかったね」

この弟はなかなかできた弟で、姉であるこの功乃が手ずから教えずとも、父からの教えのみで私の努力の結晶やらナニヤラをすこーんと飛び越えてしまったのです。根が

「防衛」の魔術向きのおっとりした性格で、魔術回路の質も量も私より少し上ということもあって、父も母も「功介が跡取りで良かった良かった」などと安心しているほど。

そういう私もそれと同じ気持ちです。だって、いまどき魔術とか、ばかばかしいじゃないですか。私は普通の女性として働き、そこそこカツコイイ男の人と恋に落ち、真っ白な教会で式を開き、専業主婦として生きていきたいのです。魔術師の跡継ぎなんてもつてのほかか、ノーマルなアヴァンチュールがほしいのです。

「……ねーちゃん?」

「はっ」

弟の声で我に返りました。危ない危ない。

「えと、はいはい。ルーンだっけ、いいよ、どんどこい」

「じゃあ、守護系のルーンだけ教えて」

その言葉にぴきりと反応します。

「ルーンを甘くみちやだめよっ。呪いから加護まで、幅広くやってこそルーンを学ぶ価値があるんだからね」

「……はあ」

「じゃあ、とりあえず基本のルーン文字からね。ええーと、部屋にあったかなあ。見てくるね」

「うん、お願い」

弟のテンションの低い領きを確認して、私は隣りにある私室に向かいました。

ぎしぎしと廊下を歩いてみると、なんだか「日本人だなあ」と再確認している気がします。それだけでも、この平屋に引越してきた甲斐があるというもの。

このあたりは平地で、海はおろか川も湖もない土地です。だからこそ、ここに住むと決めたのです。最初にこの平屋に立ち入ったときは溢れんばかりの時代錯誤感に面食らいましたが、慣れてしまえばそれはそれ、住めば都というやつです。

私の部屋は居間のすぐ隣で、居間の反対側には魔術工房、向かい側には廊下があり、その廊下の向こうに弟の私室があります。この和式の平屋では「私室」といつても大したものではありません。扉に鍵がかかるわけではないし、音は簡単に外に漏れます。それでも、こういった部屋があると安心してしまうのは、現代人だからなのでしょう。曲がりなりにもプライベートな空間があると、そこでホッと一息つくことができます。

がらりとふすまを開け、私室に入ると、やっぱりなんだかホッとしました。

弟が気づいているかどうかはわかりませんが、私はとつても乙女です。「恋する」という文字がつかないのは、その相手が居ないからです。素敵な殿方がいらつしやれば、晴れて私は「恋する乙女」に成ることでしょう。

その証拠に、部屋には百円均一で買い集めた可愛らしい小物がたくさん並べてありま

す。本棚にも、ぺたぺたとキツツイーちゃんのステッカーを貼っています。なのに、弟がこの部屋を訪れたとき「混沌」という単語を口にしたこと、それが忘れたくても忘れられません。

「ええつと、ルーンの本とか、持ってきてたかなあ」

がさがさと本棚を漁ってみますが、ケータイ小説やグルメ雑誌ばかりで、魔導書なんて一向に出てきません。

「あつ、これ、なつかしー」

と、出てきたのは、高校の卒業アルバムでした。

実家から引越してくるとき、「ホームシックになったら見よう」と思ってたってきたのですが、結局一度も開くことはありませんでした。私はホームシックになんてならなかったし、このアルバムそのものの存在も忘れてしまっていたのです。

「あはは、変な顔」

もう五年ほど前の自分の顔を見てみると、なんだか別人のように見えました。肉体的にはそれほど変わっていないはずなのに、どうしてこうも変わって見えるのでしょうか。髪型やメイクだけでは、こんなに変わらないと思うのです。

他のクラスメイトの顔も、今知っている顔とは違うように見えました。でも、同じ人だと認識することは出来ず。ぜんぜん違う顔だけれど、どこか似ている気がする。こ

ういうのを、面影がある、というのですね。

「なるほどなあ」

ページをめくると、別のクラスのクラスメイトがずらりと並んでいました。その中に、何度も見た顔を見つけて、思わず頬が緩んでしまいます。

「やつぱかっこいいなあ」

私の好きだった男の子。同じ部活で、個人的に校内一のイケメンだと思っていたその顔は、今見ても「イケメン」だと感じられました。

「今、何してんだろ」

アルバムから顔を上げ、ほう、と息をつき、思いを馳せてみると、なんだか高校生の頃に戻ったような気がしました。

彼が何をしているのかはよくわかりません。高校の頃は良き友達で、それ以上になることはなく、また、私もそれでいいやと思っていたのです。

いま思い返してみれば、なんてもったいない。好きなひとが居るのなら、アタックするべきです。

むん、と胸を張り、「今度イイオトコ見つけたらとっ捕まえてやる」と決意した瞬間、アルバムから一枚のメモが落ちてきました。

「うん? ……、これはっ」

「コースケ、こんなんあつた」

「……………」

金魚のように口を開けるマイ・ブラザー。

「その口にねじ込むぞ」

「すみませんっ。って、なに、それ」

「ルーン。高校の頃に一覽表作ったのが出てきたの」

手に持ったピンク色のメモ用紙をぴらぴらさせていると、弟が、明らかに疑いの色をその瞳に浮かべているのが見て取れました。

「作りは雑だけど、内容はホンモノよ。騙されたと思って、これを見てやってみれ」

「ぺしん、と顔にそのメモを叩きつけてやると、弟がそれをおずおずと掴んだので離してやりました。」

「うわ、多いな。何からやればいいの」

「え？ そーねえ……」

弟が覗き込んでいるメモを、上から見下ろしてめぼしい物を探してみると、確かにちよつと文字が多い気がしました。

「確かに、一気に全部やるのはキツイわ」

「でしょ?」

「じゃー、とりあえず結界からでいいんじゃないの」

そう言つて、三つのルーンを指差してあげます。

「エイワズと、エオローと、イングズで、いけるんじゃないかな」

「ええと……退去と、防御と、……豊穰?」

「うん、この場合のイングズは、完了の意味。退去と^{エイワズ}防御^{エオロー}のルーンを相乗してあげる

の」

「へえ、便利だね」

私の説明に、ふむふむと頷く弟。

「そーよ。ルーンつて、いろいろ発展させやすいの。一つの文字でも、色んな意味を持たせてあげられるし」

「ふうん。これ、もらつてもいいの?」

「あたしはもう覚えてるからいーよ。あげちゃうわ」

「ありがと。で、具体的に、どう使えば」

紙を見つめたまま、弟が真剣な表情で質問してきました。

「うーん……今の結界の起点つて、敷地の四隅だっけ」

「うん」

「じゃあ、この家の床板をちよつとだけどつかから切ってきて、四枚刻んで、四隅に埋めとけばいいんじゃない」

「ね、ねーちゃん、なんかそれ、テキトーすぎない？」

「結界そのものはうちの魔術使つて張るのよ。あくまでルーンは補助というか、サブエンジンみたいな」

「あー、なるほど」

今の説明だけでわかったようで、それきり弟は黙りこんでしまいました。

「……できそう？」

何か誤解していないか不安になり、つい、聞いてしまいました。

「……………さてはねーちゃん、やったことないな」

「ぐ」

思いもよらぬカウンターを受けて、言葉が一瞬途切れてしまいます。

「あ、あるわよお。でも、家全体なんて、でっかいのは、その……」

「まあ、そこはなんとかするから。他のルーン、後で教えてね」

そう言って立ち去っていく弟。

やはり、魔術に関しては、弟は優秀です。

部屋には、よよよ、と崩れる私と、それを慰めてくれるキツツイーちゃんのキーホル

ダーだけが残りました。

そして翌日、結界を探ってみると、綺麗なルーンの結界が張られていました。

昔に私が張った、自分の部屋だけの小さな結界と比べて、何倍も大きいのに、とても緻密で、繊細な魔力殺しの結界。

「すげー」

これならば、宮本家も安泰というものです。

なんだか私も嬉しくなって、その日の仕事はとても順調に終わりました。
いいことをすると、いい気分になるのですね。

三話 学友

僕の通っている大学は、そう大きなものではない。

姉の住む平屋に近い、という理由だけで選んだ大学なので当然といえば当然である。

大学を出た後も、他の学生のように就職するのではなく、魔術師として宮本家を継ぐことになっている。

本来なら魔術協会の総本山である時計塔に行くのが一番良いのだろうが、それには父が反対した。僕の父は、ちょうど大学生の頃に時計塔で魔術を学んでいたのだが、「あそこは魔窟だ」とか、「日本人には合わない」などと言い、僕がそこで魔術を学ぶことに反対していた。僕自身、別に時計塔に何か関心を持っていたわけでもなかった。今の大学を選んだのだった。

「なー功介え」

ちなみに父が時計塔に対して一番不快に感じていることは、そこにいる人々が皆現代人として壊れているかららしい。通りすぎる人々はただ一人の例外もなく根っからの魔術師であり、人間としては終わっている連中ばかりなのだとか。

「おーい、聞いてないのかよ、おーい」

そこまで言われると逆に気になるのが人の性というもので、去年の夏休みの数日間だけ、時計塔で過ごした。無論父にも許可をとったのである。

向こうで過ごすことに関しては何も問題はなかった。我が宮本家は時計塔と物理的に距離を置いているものの、交流は年がら年中行っている。我が家はある霊地の管理者だが、霊地としては特に価値はない。質はいいものの、変わった龍脈があったりするわけではない。価値があるのは霊地としてではなく、観光地としてだ。

「コーすけクーン、ボク、泣いちゃうぞ？」

宮本家は日本有数の観光地を、影で守る管理者なのだ。観光地一体を魔術的に支配しているものの、入り込むものに攻撃したりするわけではない。攻撃されたら防衛するだけの管理者だ。だからこそ、その魔術特性は「守護」に特化している。

その地を観光しに来た魔術師の殆どは、宮本家に顔を出すのが通例となっている。自分分は攻撃しに来たわけではない、という意思表示らしい。

宮本の守護の力は強力だ。数年前、かの有名な「暴れん坊姉妹」が、揃ってうちを訪れてしまったことがあった。稀代の壊し屋と稀代の人形師による、自然発生したその殺しあいに對して、宮本家は離れ一棟の半壊までに被害を抑えこんだ。この一件で宮本の名は一気に時計塔に広まったとか、なんとか。

「コーおーすーけー」

そういう訳で、時計塔には宮本家と縁のある人も多く、そこにしばしホームステイさせてもらったのだ。

実際に訪れた時計塔の感想はというと、やはり父と同じものだった。そこに居る人間は皆人格破綻者で、魔術師としてはこの上なく素晴らしいが、一人の人間としてはなんとしても関わりたくないといった人間ばかりがウヨウヨ居た。

「このシスコン」

「なんだと」

「あ、やっと反応しやがった。無視すんなよ、泣くぞ」

隣りに座る同回生に顔を向ける。

「で、なに、つとむ努」

「おい、マジで聞いてなかったのか」

「課題やってたんだもん、ほら」

そう言つて、目の前のディスプレイを指し示す。そこには、日本語の下手な中国人講師によるわかりづらい授業をまとめた文章が、たつぷり三ページ分表示されていた。

「そりゃマジメなことだ」

「どーも。で？」

「お前、ねーちゃんと暮らしてるんだろ？」

「ああ、そうだよ」

視線をディスプレイに戻す。

「俺も混ぜろ」

「……………」

キーボードを打とうとする手を止める。

父は、時計塔には人格破綻者しか居ないと言っていた。事実、僕がそこで新しく出会った人々は、全員、ヒトとしてどこか壊れていた。

だが、今僕の隣で椅子にあぐらをかいているこのツトムのように、この大学にもそういう人格破綻者は多かった。思うに、そも現代においては、こういった破綻者のほうが正常なのではないか。そう考えてしまうほど、マトモな人間が少ないのである。

「むむ、なんかシツレイなこと考えてるな、てめえ」

「……遊びに来たいって意味で、いい？」

「おう、そうそう。合ってるぞ」

「まあ、いいけど……。いつ？」

「日曜の昼でどうぞ」

「わかった。一応、ねーちゃんに訊いてみるよ」

「やったー」

それだけ言って、椅子から飛び降り、ダツシユで去っていく努。

アイツとは同じゼミであり、チューターから「あのバカの面倒を頼んだ」と任されてしまった。その代わりに各学期につき三回まで遅刻をチャラにしてもらっているが、正直割に合わない。

「悪いやつじゃないから、いいけど」

作成したレポートをフラツシユメモリに保存し、鞆に収める。

携帯電話を取り出し、姉に今の話を伝えようかと思つたが、急ぐ話でもないな、と、帰ってから話すことに決めた。

午後八時。

「ただいまあ」

スーツ姿の姉が帰ってきた。

「おかえり。晩ごはん、できてるよ」

「さすが我が弟っ。メニューは如何に？」

「コンビニのお惣菜フルコース」

「よしよし。最近のは美味しいもんねえ」

電子レンジで温めて盛りつけただけの惣菜を皿に載せ、ちやぶ台へ運んでいく。

「手洗って、着替えて、ついでにご飯盛ってきて」

「よかろう」

そう言つて私室へと姿を消す姉。

この平屋は、居間と姉の部屋が壁を隔ててすぐ隣にある、という構造だ。なので。

「あーっ、キッツイーちゃんのパンツがあー」

とかいう独り言が駄々漏れだ。

「……」近所さんに聞こえるんじゃないのかなあ」

姉の声を聞かないようにちやぶ台に皿を並べながら、ふと、今日の大学でのことを思い出した。

「そーいや、忘れてた」

姉の部屋のふすまが開く音がする。

「……」飯が、先かな」

今日は僕ら姉弟の好きなバラエティ番組が放映される日であり、アイツの話は、それが終わつてからでもいいかなあ、などと思つてしまった。

「あれ、コースケ、誰か来たよ」

日曜日の昼下がり、昼食を食べ終えて、居間でテレビをだらつと見ていると、玄関の

物音に姉が反応した。

「一応ここ、ねーちゃんの家なんだから、ねーちゃんが行くべきじゃないの」

「居候の身で何を申すかつ。行つてまいれー」

「わぶ。い、いそうろうじやな、ぷえつ」

座布団が数枚飛来する。避けきれずに被弾してしまった。

「わ、わかつたから」

「おう、行つてこい」

やれやれと立ち上がり、ふすまを引く。

「はあい」

玄関のノックは力強く響き続ける。返事をしてみても止まらない。セールスだろうか。

がらり、と戸を開く。

そこには。

「へい、来たぜメーン」

バカが居た。

「呼んでないぞ」

「ウツソ、マジかよ。今日遊びに行くつて行つたじゃん、俺」

「え？ あつ」

そんなこともあつたか。

忘れていた。

「……バカは僕だったか」

「ん？ なんか言つたか？」

「なんでもない。ちよつとそこで待つてて」

がらがらと戸を閉じ、一応鍵をかけておいた。

そそくさと居間のふすまを引き、中にいる姉の姿を覗き見る。

「……マズい」

姉は部屋着である。なんというか、結構露出の激し目な。

梅雨はまだ明けないが、今日は珍しく晴天だ。しかし梅雨の時期の晴れというのは、凄まじく不快感を煽る。それは気温が高いせいでもあるが、湿度が高いせいでもある。ということ、姉は黒のタンクトップとホットパンツ、という出で立ちだ。

居間のふすまを開く。

「ねーちゃん」

「お、どした？」

「友達が来たんだけど、入れてもいいかな」

「ああ、そうだったんだ。いいぞー、呼べ呼べ。面白いじゃん」

「……」

姉が動く気配はない。

この平屋は、構造上玄関から僕の部屋まで直に行くことは出来ない。玄関と隣接して居間があり、その居間と隣接して姉の部屋があり、その姉の部屋の向かいに僕の部屋がある。僕の部屋に努を入れようにも、この居間を通らないといけないのだ。

「……ねーちゃん、服、服」

「へ？」

ぽかんと僕の顔を見て、続けて自分の格好を見下ろす姉。

「あー、なかなか刺激的ねえ。来たのは女の子かな？」

「なんでさ、男だよ」

「それはいかんな」

「いや、どっちでもマズいって」

「でも家主として、どういう客人かは見ときたいな」

「じゃーなんか着てきてよ。居間に入れとくからさ」

「もう、仕方ないわねえ」

ぶんぶん、と言いながら部屋へ戻っていく姉。

「ところで、どんな子？」

ふすまを閉めきる前に、姉が問うた。

「……………バカ」

「うは、面白そー。名前はなんて言うの」

この姉は、面白いものが大好きだ。

「山西、努」

努も、悪い意味で、好物になるだろう。

「おっじやまつしまーつす」

玄関を開けるなり、意気揚々と侵入する努。

「そっちが居間だから、そこで待ってて。なんかジュース淹れてくる」

「頼んだっ」

気付かれないように結界を操作し、居間より向こう側には行かないよう、視線避けを強化する。あちら側には姉と僕の部屋だけでなく、共有の魔術工房もある。危険なものはなかったはずだが、念には念を。

「なっちゃん」を三つのコップに注ぎ、お盆に乗せて居間へ運ぶ。ふすまを開くと、玄関側に座った努がきよろきよろしていた。

「どうかした？」

「なあ、美人の姉ちゃんは？」

背後の壁の向こうから、ブフツという声が聞こえた気がした。

「……美人、なんて言つてないだろ」

ちやぶ台にコップを並べる。

「お、三つ？ てことは居るんだな？」

「ああ、家主としてどんなやつか見張りたいって」

「え、なに、怖い人なの？」

「どうだろうね」

自分のコップを置き、テレビのスイッチを点ける。

「というか、うちに来ても別にすることないぞ」

「お前の姉ちゃんが見たい」

「……素直だよな、お前って」

「褒めてもなんでもねーぞ」

「褒めてな……いや、褒めてるのか？」

点けたテレビはワイドショーを流していた。どうでもいい芸能人のゴシップに、偉そうな学者が文句を言っている。

ぼうつと男二人でその画面を眺めていると、がらりと、後ろでふすまの開く音がした。

「いらつしやい、ツトムくん」

「ふおうつ、お、おひやましてまふつ」

向かいに座った努が歓声を上げる。お気に召したらしい。

「……着替えてたんじゃなかったの」

姉は淡い色のカーデイガンを羽織っていたが、逆に言うときれいだけしか変化がなかった。下はホットパンツのままである。一体何をしていたのか。

「男の子ってどんな話するのかなあつて」

「で、黙りこんじやったから出てきたと」

「そうよ。男の子ってこんなものなの？」

「そうだよ。な、努」

「へ？ う、うん、そうです」

目に見えてギクシヤクしている。

いつか、努が言っていたつけ。

『俺、脚が好きなんだわ、脚。胸とか尻より脚だけ。マジ、女といえば脚だわ』

そのことを知ってか知らずか、というか絶対知らないけど、姉はホットパンツのまま

だ。こうして見なおしてみると、美脚の部類に入りそうなことが僕にも分かる。

努のその視線を察したらしい姉が、わざとゆっくり、僕の隣に正座する。きちんと座って、ちやぶ台に脚が隠れた瞬間、努が落胆したのを確認した。

「え、えつと、はじめま、して、やまにしつとむでふ」

「はじめまして。宮本功乃です」

慌てふためく努に対し、白々しいほどしおらしく対応する姉。

これは、絶対、からかっている。

「……………」

努のことが少し哀れに思え、そつと目を閉じた。

なんやかんやで、努と姉の話は盛り上がった。

たまたま好きなアーティストが同じだったらしく、その話だけでたつぷり三時間も話していた。無論、姉はいつものさばさば感を微塵もない感じさせない、慎ましやかなままで。

「私もあの曲は好きよ。あの言葉遊びのセンスは、やっぱり流石よね」

「やっぱそうですよねっ。あそこからのストレートな表現が、ジブン、めっちゃやしびれるんすよ」

「あら、私はちよつと、その、直球すぎるかなあ、なんて思っちゃうわ」
頬に手を添えながら、いけしやあしやあと抜かしている。

それにしても、こういつた奥ゆかしい振る舞いが、やけに板についている。職場ではこんな雰囲気の仕事をしているのだろうか。

ちなみに僕はというと、このアーティストの話が始まって三分後には手持ちの文庫本に熱中していた。ハッキリ言つてそのアーティストのことは全く知らないのだ。メジャーであるので名前くらいは知っているものの、詳しいことは知らない。

ふと、壁にかけられた時計を見上げる。夕暮れどきだ。

「努、もうこんな時間だよ」

「え？ あ、ホントだ」

「あら、もうお帰り？」

姉が小首を傾げる。いちいち仕草が細かい。

「はい、バイトがあつて」

「そう……。今日は楽しかったわ、気をつけて帰つてね」

「は、はいっ。……あの、また、来てもいいですか？」

おずおずと尋ねる努に、満面の笑みで応える姉。

「もちろん。いつでも遊びに来てね」

「ありがとうございますっ」

「ペ〜ペ〜ことお辞儀している。

「じゃあ、バス停まで送るよ」

「ん、心配ご無用。今日は原チャで来てるから。それじゃ、お邪魔しました、功乃さん」

「うん、またね。ばいばい」

ひらひらと手を振る姉を見、後ろ髪を引かれるようにして居間から去る努。その背中を追いかける。

「満足した？」

玄関で靴をはく同回生に声をかける。

「……………ヤベーな」

「は？」

「いつか、お前のこと義弟にしてやる」

それだけ言つて、玄関から出て行つた。原付バイクの音が遠ざかっていくのを確認し、玄関を施錠する。

「やれやれ」

居間に戻ると、しおらしかつた姉がいつもの姉に戻っていた。自分の座布団と僕が座っていた座布団とを組み合わせ、ぐでつと横たわっている。

「からかうのもほどほどにしてやってよ」

ペットボトルごともってきた「なっちゃん」をコップに注ぐ。

「ごめんごめん、面白くって」

くはは、と弁明する姉。

「なんかやけに慣れてたけど、職場でもあんな感じなの？」

「そーねー。女性社員に求められるのは女らしさですからな」

「ふうん」

「……でも、ああいうコも、ありなのかなあ」

「え?」

耳を疑った。

「あはは、じょーだんじょーだん。あたしのタイプはもっと男らしいひとよ」

「知ってる。シユワルツエネツガー、好きだもんね」

「そうそう。やつぱ男といえはガチムチよ。……だけど、ツトムくんみたいな、ああいう、ストレートっていうのかな、あんなタイプのコも、面白いね」

天井を眺めながら、話す姉。

ぼうつとした目からは、その言葉の真意を汲み取ることはできなかつた。

「そーいえばさ、この家、人避けというか、視線避けの結界も張ってるんじゃないの？」

「そうだけど、それがどうかした？」

「いや、ツトムくんがなんで、うちに来れたのかわかって」

「ああ。今張ってる人避けは、そんなに強くないんだ。ツトムみたいに、明確にこの家を
目指す目的があつたら意味ないんだよ」

「じゃー結界の意味無いじゃん」

「そんなことないよ。無作為に選ばれることはないから、空き巣とか、キャッチセールス
とかはまず来ないはず。それに、いざとなれば強化もできるしね」

「ははーん、なるほど。さすがねえ」

「どういたしまして」

「じゃ、おやすみ」

「うん、おやすみ」

四話 蒼崎

梅雨がそろそろ明けそうです。

そんな折、珍しく、父からメールが届きました。

魔術師の当主が携帯電話でメールをするなんて、時計塔の人たちからすれば卒倒モノなのでしようけれど、我が家はそんなこと関係なくスマートフォンやらパソコンやらをフルに活用し、この情報化社会を謳歌しています。

メールの内容は父らしい、シンプルな一文。

『あの人形師さんが近々来日するらしいから、留意しておきなさい』

こういったメールは跡継ぎの功介に送ってください、と返信しておきました。

けれど、わざわざ私に連絡したということは、きっとこの平屋にも遊びに来るかもしれないからなのでしょう。

今日は土曜日で、珍しく私は会社がお休みなのですけれど、弟は臨時講義に行つてしまつてひとりぼっちです。

「コーズケに話すのは、帰ってきてからでいいよねえ」

布団の上で向かい合ったキツツイーちゃんぬいぐるみに問いかけ、そのアタマをう

んうん、と動かしませぬ。

「橙子さん、かあ。最後に会ったのいつだったけ」

ぼふ、と布団に寝っ転がり、記憶を紐解いてみますと、それは高校三年生のことでした。

「ええと、高三っていうと、十七だった、あ、十八か。じゃー、今二十三だから、あー……、ちようど五年前？」

随分と年月が流れたものです。

橙子さんは兎にも角にも強烈なお方で、その印象たるや、五年前の記憶ですら、まるで昨日のことのように思い出せるほど、鮮烈なものでした。

当時、花の女子高生だった私。

学校へは実家から通っていましたが、フェリーに乗って通わなければならないため、登下校がなかなか苦痛だったのを憶えています。

その船での移動の合間に、コツコツとルーン文字について勉強していました。

魔術としての勉強というよりは、占いやお守りとして、それぞれの文字のもつ意味やその使い方を知る、というものです。魔術の研究をフェリーでするわけにはいきませんから、そういった意味を家の外で勉強し、家に帰ってそれを実践する、というのが日課でした。

弟が宮本家の後を継ぐ、と決まったのは、確か功介が小学校に上がったころ。潜在的な魔術師としての資質が私より優れていたから、功介を選んだ……のではなく、単に弟が男の子であったから。私もそれを良しとして、気が向けば魔術の勉強をするという、魔術師ではなく「魔術使い」であることを選びました。

宮本の魔術刻印も、既に功介が全て受け継いでいます。と言っても、我が家の魔術はそのほとんどがテンカウントによる大詠唱を要する防衛術なので、弟の魔術刻印はそれらを記憶しておくだけのメモリーカードみたいなもの。一般の魔術刻印は魔術をシングルアクション工程に縮めてくれるのですが、功介が魔術を使うときは、刻印から読み取った術式を功介自身が陣として構築なり展開なりする必要があるのでか。

私にはよくわからないことだし、どうでもいいのでよく覚えていません。とりあえず私は、基本的な防衛魔術だけを護身用に教えてもらいました。これは後々わかったことですが、この「基本的な防衛魔術」だけでも、なんだかとてもスゴイものなのだそうです。

そんなこんなで、我流でルーン魔術を研鑽していた、十八歳の私。
そしてその夏に、彼女達はやってきたのです。

A O入試を使ったので、夏休みに入る前から私の進路は決まっていました。

夏休みが始まって、必死に受験勉強を始めるクラスメイトを尻目に、私は高校生活最後の夏をエンジョイしてやる、と意気込んでもりもり朝ごはんを食べていました。

外ではもう蝉が鳴いていますが、朝のうちはまだ涼しく、大きく開けた窓からは冷たい朝の風が吹き込んできます。

キッチンで洗い物をする母と、私と向い合ってテーブルにき、ご飯を食べる弟。

そんなのんびりした雰囲気の間、父が慌てて駆け込んできました。

「おお、ここに居たか。まずいことになったよ、母さん」

「どうしたんです」

母はいつでもおっとりしています。功介の絶妙なおっとり具合は、きつと母由来のものですね。

「確か橙子さんが来るの、明日だろう?」

「ええ、そうですよ。どうせいらっしやるなら秋がオススメですよって言ったんですけど、そうしたらあのひと、『その時期は人が多いから危ない』なんて言うものですから」

おほほ、なんて笑う母に対し、顔面蒼白で話を続ける父。

「それと同じ理由で、明日、青子さんが来るそうだ」

がちゃん、と何かが落ちる音。見れば、母が手に持っていたらしい、泡のついたままのマグカップがシンクに転がっていました。

「そ、そんな。どうにかならないんですか。どちらかに日を改めて頂くとか」

「だめだ、遅すぎる。たぶん二人とも日本に入っている頃だろう」

「あのお二人が出会ったら、この島が焼け野原になってしまいますよ」

「そんなことになったら教会でも隠匿できまい。橙子さんは冷静な人だからそんなことはしないだろうが、ああ、でも、青子さんの事となると、あの人は冷静さを失ってしまふ。ど、どうすれば、うああ」

「落ち着いてください、今冷静でないのはあなたですよ、平介さん」

慌てふためく父をなだめる母。

「こうなったら仕方ありません。せめて、あの離れに二人をお呼びしましょう」

「母さん、それは」

「宮本家はこの地を守る家でしょう。今こそ、その力を振るうべき時です」

しっかりとしているようで根がふにやふにやな父に対し、母は、おっとりしているようで根がしっかりとしています。我が家の当主は父ですが、それは母が居てこそ。母の陰ながらのサポートにより、宮本家は成り立っているのです。

こういう夫婦になりたいなあ、なんてぼうつとしてしていると、正面に座って一緒にご飯を食べていた功介の顔も真つ青なことに気付きました。

その顔を見て、事態の深刻さを知りました。

蒼崎姉妹といえば、とにかく優秀な魔術師です。姉の橙子さんは封印指定を受けるほどの人形師でありルーン使い、妹の青子さんは嘘か真かあの「魔法使い」で、通称マジック・ガンナー。そしてなにより、その姉妹仲の悪さはとりわけ有名です。

ひとたび顔を合わせれば、回りを巻き込み殺しあう。

曰く、古びた校舎を粉々にした。

曰く、抑止力^{ガイア}が働きのようになった。

何があつたのかわかりませんが、とにかくこの二人が顔を合わせることがあつてはならない、ということは、魔術協会に属している魔術師ならほとんどが知っていることです。

勿論宮本家もそのことは知っており、この二人が揃つて来日することがないよう、あの手この手を使ってきました。母が言うには、聖堂教会の手を借りたことすらあつたとか。

蒼崎姉妹は、教会と協会が手を結んでしまうほどの脅威というわけです。

そして、その脅威が、二人揃つてやってくる。

「功介、飯食つたら、離れに行け。霧散の術は使えるな」

「出来るかなあ」

「やるしかない。父さんと母さんは、先に家の周りの結界から強化しておく」

言うが早いか、父と母は二人揃って居間から飛び出してしまいました。

「……あたしは、どうしたらいいかな」

存在を忘れられている気がして、しょぼん、と弟に問いかけてみました。

「ねーちゃんは、二人を説得するんだよ」

がつがつと白米を口に放り込みながら、なんでもないことのように言う弟。

「出来るかなあ」

「やるしかないよ」

「あれ、なんかデジャヴ」

「そうだね」

結局、翌朝から私は本宅の私室に閉じ込められてしまいました。

「いいか、これから来るのはお前の知っている橙子さんと青子さんじゃない。殺し屋と、壊し屋だ。どちらかが帰るまで、お前はここに居てくれ」

父の言いつけに従い、自分の部屋でしょんぼりしていると、離れからこの世のものは思えぬ音が轟きました。

雷鳴のような。

砲撃のような。

爆撃のような。

幾度も幾度も繰り返されるそれにふるふると怯えていると、唐突にそれが止んでいたことに気づきました。

結界を張っていたはずのふすまが、するすると開かれていきます。

「やあ、ひさしぶり、功乃ちゃん」

そこには、父の表現で言うところの、『殺し屋』がいました。

どういう経緯かわかりませんが、青子さんはこの島を去り、橙子さんがしばらく滞在することになったそうです。

「いやー、あのバカ、こんなところでも手を出してくるとはな」

メガネを取った橙子さんの服はあちこち焦げて、ところどころ破れていました。

「大丈夫ですか」

「ああ、大丈夫だよ。しかしこの家の結界は凄いな。離れ、まだあるぞ」

そういって、窓の外を指差しました。つられてそつちを覗き見ると、黒い煙を上げる離れがありました。屋根が半分吹き飛んでいます。一応原型はとどめています。火は消えているし、崩落もしないようです。

それを見ながら橙子さんは、ふうむ、と考えこんでいました。

「単純な防衛の魔術だけではないな。大源^{マナ}を操作して、私達には使えないようにしている」

「あ、それ、たぶんコースケの魔術です」

「あの坊やが？ まさか」

「昨日の朝、父が言っていたんです。コースケに、むさんのじゅつ、っていうのを使うようになって」

「……霧散の術か。面白いな、それはもう固有結界に近い。それをあの坊やが使う、と。まだまだ、現代の魔術師も捨てたものではないらしい」

そう言いながら懐をぐそぐそやる橙子さん。

「あ、煙草はダメですよ」

「そうか。では、居間で吸わせてもらおうとしよう」

どっこいせ、と畳から立ち上がった橙子さんの視線が、私の本棚に止まりました。

「おや、ルーンをやっているのか」

「へ？ あ、ええ、はい。高校で流行ってるんです、ルーン占い」

「ああ、なるほどなるほど。……若いなあ」

何かツポに入ったらしく、くくく、とお腹を抱え込んで笑っています。橙子さんとは何度かお会いしていますが、このひとの笑いのツポが未だにわかりません。

「よし、じゃあ、離れを壊しちゃったお詫びをしよう」

「お詫び、ですか？」

「ああ。ここでひとりで待っているのは怖かっただろう。がんばった功乃に、私がルーンを教えてあげる」

「ほ、ほんとですかっ」

「勿論。今夜から二晩ほど、ここで宿を取らせてもらうことになったから、夜になったら教えてあげよう」

信じられないことです。

あの橙子さんから、直々にルーン魔術を教えてもらえるなんて。

「ありがとうございますっ」

「うむ。では、一服したら戻ってくる」

「はい、お待ちします」

颯爽と立ち去る橙子さんに深々と礼をしました。

そしてそのあと、橙子さんは本当に私にルーン魔術を教えてくださいました。

何もかも我流で、ずさんだった私のルーンは、橙子さんとの二晩で別物のように洗練されていきました。

あつという間の二日間。

このときだけは、帰ってしまったのが青子さんで良かったなあ、なんて、思っていました。

ちなみに、それ以来どういわけか姉妹揃って宮本家を訪ねてくるようになったらしく、その度に家のあちこちが壊されているとか。

でももうその翌年から大学に進学し、この平屋で一人暮らしを始めた私には関わりのないことです。

ただ、以前帰省したとき、私の隣の部屋の壁がごつそりと削れていたので、弟に境界を張ってもらおうよう頼むことになりました。

「もう五年かあ」

それ以来、橙子さんとは会っていません。

青子さんはちょうど去年、弟がこの平屋に引越してきた直後に遊びにいらつしやいましたけれど、橙子さんは世界を飛び回ったり、そのへんに隠れたり、いろいろ忙しいそうです。

私は橙子さんと仲良しで、弟は青子さんと仲良しです。そのことについて青子さんは「似た者同士ってことよね」なんてことを言っていました。何を以って似た者同士と言っていたのか、今度会ったら問いつめないといけません。

玄関から鍵を開ける音が聞こえてきました。弟が帰ってきたようです。この報せを聞いて、弟はどんな反応をするのでしょうか。少し、楽しみです。

五話 姉

「な」

その言葉によるあまりの衝撃に、持っていた湯のみを落としてしまった。

姉は腹を抱えて笑っている。よほど僕の反応がツボに入ったのか、畳をばんばん叩きはじめた。

先ほどの姉の言葉が、頭のなかでリピートされる。

『橙子さんが来るらしいよ』

蒼崎橙子は、封印指定を受けるほど優秀な魔術師でありながら、電子機器を使いこなす立派な現代人である。

ただ、僕としてはあの姉妹喧嘩が完全にトラウマになっているので、できればあまり会いたくないのだ。

特に、橙子さんとは。

あの夏の、姉妹喧嘩の日のその前日。

僕は父に言われた通り「霧散の術」を離れに展開し、あとは魔力を流し起動するだけ、

という状態にしておいた。

その準備だけで日が暮れてしまうほどに時間がかかったが、今までで一番早く仕上げられた。この術を身に付けてすぐのころは三日ほどかかったものだ。

父と母による強力な守護の結界も張られた。そもそも離れは我が家の魔術工房で、元から幾重にも結界が張られているのだ。

魔術的な結界だけでなく、物理的にも結界になるような構造をしているので、中で暴れても外に被害は出ない。

だが、相手はあのミス・アオザキ。一般の魔術師とは格が十段階くらい違う。霧散の術も果たして効果があるか怪しい。

「この屋敷は最悪全壊しても構わんから、いざとなったらお前は自分の身と島を守れ」
父はそれだけ言って、僕を寝室へ追いやった。

そして、翌日。

姉は父による結界で部屋に閉じ込められた。姉の部屋は離れからは距離があるので大丈夫だろうが、念には念を、ということらしい。

蒼崎姉妹がやってくるのは昼すぎ。それまでご飯をもりもり食べて、魔力を温存しておく。

からんからん、と、屋根裏に仕込んだ鳴子の音が響いた。

「来たぞ」

敷地内に誰かが来た合図だ。そして、この程度の音だと、まだひとりだけ。

二人が全く同じタイミングで来たら万事休す……だったのだが、それは外れたらしい。

「母さんが離れに誘導してくれる。俺達は先回りして結界の準備だ」

続いて鳴るチャイムの音と同時に、僕達も動き出す。母は玄関へ、僕と父は屋敷の裏から離れに回る。

「いらつしやませ、青子さん」

母の声が聞こえた。先に来たのは青子さんだったらしい。

「今日は少し客間を改築しております。父と息子が離れに居ますので、そちらで少しお話をしていただけたらと、はい」

二人分の足音が離れに近づくと、

「ええと、こーすけくん、でしたっけ。今、何歳ですか？」

「息子は今年で十四になります」

「えっ、ほんとですか。うわあ、あの子ももうそんなトシかあ」

からからと、戸が開いていく。

「いらつしやいませ、青子さん。こんなところにお呼び立てして申し訳ありません」
父と並び、正座して出迎える。青子さんはいつもどおり、白のTシャツに青のジーンズ、そして大きな鞆をひとつ抱えている。

「いえ、こちらこそいきなりですみません、平介さんと。」

「がらん、がらんと鳴子がものすごい音を立てる。」

「うひゃあ、これ、何の音ですか」

「探知の結界です。……青子さん、今からとあるお客人がここにいらつしやいますが、どうか、どうか平静を保たれますよう、お願い申し上げます」

父が青子さんに平伏している。僕もそれに倣う。母は駆け足で玄関に向かっていた。「私は誰かれ構わず怒ったりしませんよ。ですから、そんなことしないでください」

果たしてその言葉はまことであつたかどうか。かくして、宮本家の最大の危機が始まった。

「おい、お前、なんでここに居る」

「そりやこつちのセリフよ。姉貴こそなんでこんなところ来てんのよ」

「こんなところ呼ばわりとはまたシツレイな妹だ。まったく、お前みたいなのと会いたくないからこんな季節に来たというのに」

「それもこっちのセリフだわ。たまには羽根を伸ばそうと思ったのに台無しじゃない」

「お前は伸ばしてばかりだろうが。その羽根、縮めたことがあるのか」

「ありますうー、縮めっぱなしですうー」

「封印指定の執行部を襲撃したじゃないか。あれで羽根を伸ばしてないなどとよく言えたものだ」

「ぐっ、う、うるさい、姉貴だつて似たようなもんじゃない」

「私は姿をくramsすだけだ。自分から喧嘩を売るような下衆な真似はしない」

「こないだ喧嘩売ってきたじゃないの」

「あれはお前から仕掛けてきたんだだろうが」

「違うわよ」

「違うわいな」

なんと見苦しい姉妹喧嘩か。

どういいうわけか二人とも、以前会ったときと変わらぬ見た目であった。

まるで二十代のような若々しさだ。

「とういか何だお前、その格好は」

「は？、いつもどおりですけど」

「違う、眼鏡だ。なんでそんなものをつけている」

「ああ、これ？ 変装ですけど、何か」

「何か、じゃない。完全に私の真似だろう」

「そうですけど、何か」

「……………」

来るぞ、と父がつぶやく。

蒼崎姉妹は、互いにもう言葉も無いらしい。交差する視線が、ちりちりと火花を散らしている。それは比喩でなく、僕の目が確かなら、本当に火花が散っている。

「お二方とも、どうか落ち着いてください」

母がすこし遠くからなだめにかかる。

が、もう耳に届いていないようだった。

「功介、やれ」

父の指示が下る。

「……………
scatter
散開」

言霊とともに、術式を起動する。

「このクソ姉貴ッ」

青子さんの右腕が上がる。

「やかましい。言葉まで品が無いなお前はッ」

橙子さんの左腕も上がる。

「喝っ」

父も守護の結界に魔力を注いでいる。

それを確認して、手元の陣の中に置いた石を動かす。

離れ一帯の魔力を操作し、中心にいる姉妹から、父と母に集中させる。

「ありゃ？」

橙子さんの右腕から、青い魔弾が放たれる。

「うん？」

それを橙子さんのオレンジのルーンが相殺する。

ぱこん、と、小さな音。

「…………どゆこと？」

青子さんはきよろきよろと周りを見渡しているが、橙子さんは違った。

僕と父のことを一瞬見て、再度視線を青子さんに戻す。

どうやら大源の異常に気づいたらしい。流星は封印指定だ。

橙子さんの炎のルーンが飛びかかる。今度は大きい。自らの魔力^{オド}だけで放ったにし

ては強力だ。

「いんなもんっ」

青子さんがそれを複数の魔弾で相殺する。ずががが、とすさまじい轟音を立ててぶつかる魔力の塊。

僕の術が操作できるのは、あくまで結界の中の大源^{マナ}だけだ。魔術師の体内の小源^{オド}までは操作できない。

「ええい、なんかよくわかんないけど喰らえーっ」

「状況把握もできんのか、この無能っ」

なので、あとは眼前の魔術師が魔力を切らすまでひたすら耐えるだけだ。

僕の術に抵抗して集まろうとするマナを、必死に散らす。父と母も、額に汗を浮かべたまま必死の形相で結界を維持する。

結局、半刻ほどその姉妹喧嘩は続いたのだった。

喧嘩は橙子さんの辛勝で終わった。

有する魔力量は互いに差はないはずだったが、橙子さんのルーンのほうが、なぜか少しかだけ青子さんの魔弾より威力があった。

なので青子さんは魔弾よりも体術による近接戦に持ち込みたかったらしいが、橙子さんのルーン魔術がそれをさせなかった。

「おぼえてろー」

ジーンズの裾を燃やしたまま、穴の空いた天井からぴよーんと飛び去る壊し屋さん。

溜息をつき、術を解く。全力の霧散の術のおかげで僕の魔力はすっからかんであった。

ばしやん、と、見えない壁が崩れた。両親の結界も解かれたらしい。

離れは天井が半分壊れ、入り口も粉碎されたが、柱に大きな損傷はなかった。これならまだ直すこともできるだろう。

離れの外には魔力の一滴すらこぼれなかったはずだ。防音の結界や探知の結界は壊れてしまったが、他の守護の結界はなんとか持ちこたえた。

「すみません平介さん。大丈夫ですか」

どこから取り出したのか、眼鏡を掛けた橙子さんが父に近寄る。

「ええ、大丈夫です。離れにお呼び立てした理由、わかっていただけましたか」

「はい。さすがは守護の家ですね、被害をここまで抑えるなんて」

部屋をぐるりと眺めた橙子さんが、首を傾げる。

「あら、娘さんはいらっしやらないんですか」

「功乃ですか。あいつは巻き込みたくなかったものですから、自室で待っているよう言いつけてあります」

その言葉に彼女は顔をしかめた。

「それは悪いことをしました。怖い思いをさせたかもしれません、顔を見に行っても？」

「ええ、ええ、それはもう。お願いします、橙子さん」

よろよろと母が近寄り、去っていくその背にお辞儀する。

それが僕が見た、橙子さんの最後の姿であった。

「橙子さん元気かなあ」

姉は笑い疲れたのか、呼吸を整えながらお茶を飲んでいた。

「コースケには言ったつけ？ あ喧嘩のあと、橙子さんにルーン教えてもらったのよ」

えっへんと胸を張る姉。

「え、ほんと？ すごいじゃん」

「でしょでしょ。高校でルーンが流行ってるんです、って話したら教えてくれたの」

その言葉で、あの日以来の謎が解けた

「ああ……、あのときの橙子さんのルーン、なんか調子よさげだったのは、そういうことか」

「ん？ どゆこと？」

せんべいを手にとった姉が尋ねる。

「たぶん、ねーちゃんの高校でルーンが流行ったおかげで、ルーンの魔術基盤が強まってたんじゃないかな」

「そんなもんで魔術が強くなるもんかい」

「事と次第によつては、なくはないと思うな。あくまでビミョーな底上げだろうけど、そのちよつとの差で青子さんに勝つたんだと思う。ほとんど引き分けだったけどね」

「へえ、すごいねえ、流行りつて」

「魔術つてのは信仰と関係してくるからね」

納得し、お茶を飲む。

「あーあ、あれがもう五年前だつていうんだから、びつくりしちゃうわねえ」

なんでもないことのように言う姉に、違和感を覚えた。

「五年?」

「そーよ、五年よ。あたしが高三のときだもの」

ばりばりとせんべいを食べる姉を尻目に、頭のなかで計算してみる。

「……………ねーちゃん、あれは六年前だよ」

「へ? だつてあたし今、二十三よ」

「あなたはこの夏で二十四でしょう」

びたり、と、姉のせんべいを食べる動作が止まる。

僕の声でも、姉の声でもない。

誰かの声が居間に響いた。

「じゃーん、来ちゃった」

がらつと開く居間のふすま。

件の人形師が、片手を大きく掲げて立っていた。

「おつ、良い反応。驚かせた甲斐があるわ」

侵入者である。

急ごしらえとはいえ、この平屋の探知の結果をくぐり抜けるとは。

「わあ、トーコさんだあ。いらつしやいませ」

腕は鈍っていないらしい。

加えて、その外見すら衰えていなかった。

本来ならとつくに四十路であるはずの蒼崎橙子は、どういいうわけか二十代、それも前半の見た目のままで。胸元をすこしはだけさせた白いシャツに、細いレザーパンツ。服装も若々しい。ブラウンの髪の毛は、何故かすつぱり短くなっていた。

「ひさしぶり、功乃ちゃん。元気そうね」

「もつちろん。橙子さんも相変わらず若いですねえ」

「当然よ。……功介くんも、ひさしぶり」

眼鏡を掛けた橙子さんの視線が、僕に向かう。

「あ、はい、お久しぶりです」

優しい視線に返事を返す。

僕が橙子さんに苦手意識があるのは、あの派手な喧嘩のせいではない。

当時は知らなかったことだが、蒼崎橙子という魔術師は、眼鏡の有無で性格をスイッチしている。

眼鏡を掛けているときは女性的で、眼鏡を外しているときは男性的。

どういう魔術かわからないが、そうやって外的人格を切り替えているのだそうだ。

僕は小さな頃から、眼鏡を掛けた橙子さんしか知らなかった。

なので、あの日の眼鏡を外した橙子さんのことが、とても怖かったのだ。

「功介くんとは、喧嘩のあと会ってなかったわね。ごめんなさいね、派手なことしちゃつて」

「それは、いいんですが、その」

「うん？ なあに？」

「……眼鏡は、掛けたまままでお願いします」

湯のみに手をかけたまま、おずおずとお願いする。

「あら、功介くんは眼鏡フェチだったの？」

「違いますっ」

あはは、と笑う橙子さん。と、姉。

青子さんが言っていたっけ。似た者同士だ、って。
全くもって同意見だ。

六話 人形師

「とある町にある、とあるマンションの話。そこに新しく入居した……Aさん、とでもしておこうかしら。そのマンションは、内向的で高級志向な彼にぴったりだったの。彼がそのマンションを気に入った何よりの理由は、玄関からリビングまでのながーい廊下。内向的なAさんにとって、玄関ってという外界と自分の部屋は、できるだけ距離があることが望ましかったのね。」

でも、ふたつだけ不満なこともあったの。ひとつ目は、その廊下に電灯がなかったこと。他の部屋には付いてるんだけど、Aさんの部屋だけは構造上つけられなかったみたい。でも、それに気づいたのが数ヶ月経った秋のことだっていうんだから、Aさんもマヌケよね。

もうひとつの不満点は、隣りに住む住人のこと。秋になって入居してきた、娘がひとりいる三大家族なんだけど、この家族がまーうるさいの。娘さんはいい子なのよ。Aさんと会うときはいつも赤いフードを被ってて、エレベーターの前で『お兄ちゃん、ボタン、押してくれる？』って頼んでくるの。まだ三才なのにひとりどこに行くんだか知らないけど、Aさんはほかの家族のことなんてどうでもいいから、不思議に思うことも

なく、その赤ずきんちゃんのパタンを押してあげたの。ボタン自体はその子が頑張れば手が届くくらいの高さなんだけど、どういいうわけか肩より上まで腕をあげようとしたの。

でも、それもAさんには関わりのないことだったわ。隣の家族が毎晩大喧嘩してても、女の子の悲鳴のような声が聞こえても、ガラスが割れるような音がしても、赤ずきんちゃんのフードが顔中のアザを隠すために父親にかぶらされているものでも、ボタンを押せないのが骨折の後遺症のせいでも、Aさんにとっては他人事だから、どうでも良かったのね。

でも、その夜はいつもと違って、ひときわうるさかった。ものすごい叫び声に、すさまじい泣き声。そのあとドアが開く音がして、Aさんの部屋に、どんどん、って音がし始めた。あんまりうるさいもんだから抗議しに行こうかとも思ったけど、Aはさんは他人事だ、自分の問題は自分で解決しろ、って無視して、テレビの音量を上げたまま寝ちゃったの。

で、次の日、隣の家族が一家心中したってことを、警察官から聞いたの。警察から事情聴取されたんだけど、寝てたから知りません、ってAさんは答えた。でも、ひとつ気がかりなことがあったから、別れ際に警官さんにこう聞いたの。

『一人娘はどうなったのでしょう?』

それに対して警官さんは難しい顔をしたのね。なんでも、凶器から血液反応は出てるんだけど、遺体はどこにもないんですって。母親に刃物で切りつけられた女の子は、なんとかエントランスまで逃げたんだけど、そこで血痕は途絶えてたの。エレベーターの前で痕跡はなくなってる、遺体はどこにもない。もちろん、エレベーターの中には一滴も血液はなかった。なんでエレベーターを使わなかったのか、なんで隣の部屋のAさんに助けを求めなかったのか、警官は不思議に思っていたけれど、Aさんはその理由がわかってた。エレベーターも、インターフォンも、どっちのボタンも女の子からは遠すぎたせいだっけわかってたけど、Aさんはそれを警官には話さなかった。

Aさんは女の子が血まみれで自分の部屋をノックする姿を想像したけれど、それでも他人事だ、って、忘れることにしたみたい。現代人らしいっちゃそうだけど、ひどい話よね。

結局、女の子の遺体は発見されなくて、捜査は打ち切られたんですって。

でもね、この話はこちらからが本番なのよ。何日かして、Aさんは深夜に、決まってある音が鳴っていることに気づくの。その音は小さい音だから気づかなかったんだけど、毎晩毎晩、小さいくせにしっかりと、どん、どんって鳴るの。それが玄関からの音だっけ。気付いたAさんは、暗い廊下を歩いて、玄関に向かった。

どなたですかーってインターフォンに話しかけても返事がないの。でも、もっと嫌

だったのは、どんどん、つて音が、Aさんが玄関に着いた途端に大きくなつたこと。鼓膜が破れそうなくらい、どんどん、どんどんつて音が鳴る。覗き窓を見ても誰も居ないのに、音だけが止まらない。

当たり前よね、高い位置にある覗き窓じゃその下までは見えないんだから。その窓の下には、赤い布をかぶつた何かがある。床が、赤く染まつてる。

Aさんはそれに気づいて、廊下を走つて部屋に戻つたわ。絶対に扉は開けないぞつて、部屋に閉じこもつた。それから毎日、深夜二時になると、どんどん、どんどん、つて音がする。小さい音なのに、Aさんの神経を削るような音。

ある夜、追い詰められたAさんは、とうとう何時でもその音が聞こえるようになってしまった。意を決して、廊下を通り、玄関の扉を開く。

——だけど、開いた先には何も居なかつた。赤い布も、赤い水たまりもなかつた。ノックの音も止まつた。当たり前よ、そんな馬鹿な話があるわけ無いわ。ああ、自分はこの事件のこと思つたより気に病んでいたんだつて思つて、Aさんは玄関に戻つて、扉を閉めた。

鍵もかけて、部屋に戻ろうとして廊下に視線を戻すと、お気に入り暗い廊下に、赤い頭巾を被つた、見慣れたモノがいる。その赤ずきはナイフでくり抜かれたスイカみたいな唇を開いて、

『お兄ちゃん。ボタン——』

「きやああああああああ」

怖くなつて叫んでしまいました。

「も、もーダメです、それ以上は禁止っ」

「えー、ここからが面白いのよ？ ホントはAさんが真犯人で、壁に赤ずきんちゃんを埋め——」

「いやあああああ」

それでも喋ろうとする橙子さんに必殺技の座布団投げスローを炸裂させます。

「ぼふう。……まあ、今のは噂だけど。でも、この一家心中と、そのあと起きたAさんの行方不明は実話よ」

「そつ、それが一番怖いですつっ」

私の言葉を聞いてけらけらと笑う橙子さん。

「そんな話、一体どこで仕入れてきたんです。聞いたこともないですよ」

それに対し、弟はなんともドライな反応です。

「昔、日本で根源の渦が観測されたーとか聞いてね、何年かして協会の監視が解けたあたりで行つてみたの。そこで聞いた話よ」

「あー、ありましたね、そんなことも」

私はそんなこと知りません。そんなことが日本であつたなんて、びっくりです。といふかなんで知らないんでしょう。

「まだ僕は中学にも上がつてなかつたから、十年くらい前じゃないですか、それ」

「そうねえ、だいたいそのくらいね。行つてみたら私の人形が動いてたから笑つちやつたわ」

「は？」

「どこぞに安く売り飛ばした素体が、なんでか人間になつてたのよ」

「説明してもらえたのはありがたいですけど、更に分かんなくなりました」

「それでよし。知らぬが仏ぢや」

南無南無、なんて言いながら茶を啜る人形師。

「そもそもなんで怪談を始めるんですか。面白い話をするぞつて言うから楽しみにしてたのに」

ちやぶ台に置かれたお皿から一枚の醤油せんべいをとりながら、同時に恨みの視線を橙子さんに向けながら聞いてみると、ふふんと笑いながら返事が帰つてきました。

「だつてそろそろ夏じゃない。そして夏といえば怪談じゃない。だからここは一発、どかーんとカマしてやろつかない」

「そーいうところは青子さんと似てますよね」

「む、功介が言うとなんか真に迫る感じがあるわね。いいのかしら？ お姉ちゃん眼鏡取っちゃうわよ？」

「すみませんでした」

平伏する弟。なんと意地のないオトコでしょう。

「それにしても、眼鏡を取った私はそんなに怖かった？」

「……とんと湯のみを置いて、意地悪な目のまま言う橙子さん。」

「それはもう。橙子さん、ギャップがありすぎるんですよ。なんとというか、眼鏡を取った橙子さんが怖いっていうより、眼鏡を取る前の橙子さんが優しすぎると思うんです」

「それくらい落差がないとやる意味ないもの」

「それはまあ、そうですけど」

「なんだかまだ言い足りないさそうにもぐもぐしています。」

「男らしくしなさいよ、コースケ」

「ねーちゃんと橙子さんが男らしすぎるもんだから、バランス取ってるんだよ」

「わはは。おい、アンサス使うぞ」

「うひゃ」

「トーコさん、眼鏡つけてるのに地が出てますよ」

「あら、眼鏡取ったほうが素だなんて言った覚えはないわよ？」

「あれ、そうでしたっけ？」

「どうだったかな」

「そこは自信持ってくださいよ」

「じゃあ、ぜったい言ってますん」

「じゃあ、つて」

つい笑いがこぼれてしまいました。

弟に目をやると、さっきの橙子さんの一言で完全に怯えていました。心の傷は深いようです。

「やれやれ」

二枚目のおせんべいをばりばりやっていると、唐突に橙子さんが立ち上がりました。

「じゃ、私は帰るかな」

「え、もう帰っちゃうんですか、トーコさん」

「うん。私が日本に入り浸ってることは協会にバレてるから、ちゃんとした隠れ家に居るか、こまめに移動してなきや捕まっちゃうわ」

「封印指定つて、大変ですなえ」

お茶を飲みながら、ボケーっと言う弟に橙子さんが喝を入れました。

「それはもう。というか功介、あなたも注意しなさい。あの霧散の術とかいうの、あれが

使いこなせたら封印指定モノよ」

「え、そーですかね。準備タイヘンですよ」

「でも、アレってあなたしか使えないんじゃない?」

橙子さんの目がきらんとひかります。私はそんなこと聞いたことがありません。

「……まあ、はい。刻印の魔術をアレンジしたやつなんで、親父は使えません」

「大気中のマナをあんなに自在に使えるのは、才能のなせる業でしょうね。もつと大規模に、もつとスピーディーに展開出来るようになればあなたは無敵になるけど、そのまま封印指定直行だわ」

「うげ。鍛錬しないほうがいいですか」

「いいえ、もつと鍛錬すべき。知ってるだろうけど、封印指定つてのは一代限りの神秘に對してのもの。あなたはその霧散の術を後世に遺して、再現できるようにすればいいのよ」

その言葉に弟が顔をしかめました。

「難しいことを言いますね」

「生涯をかけて取り組むべき課題だもの、難しいに決まってるわ。ま、頑張りなさい。ああそれと」

ふすまを開こうとした手を止めて、橙子さんが振り返りました。

「功乃ちゃん、ルーンはまだやってるの？」

「へ？ いえ、その……、大学入ったあたりで、魔術はほとんどやめちゃいました」

折角教えていただいたのに、と、申し訳なくなつてうつつむいてしまいました

「そっか。そうね、そういうものよね」

それなのに、橙子さんはどこか嬉しそうでした。

「うん、きつとあなたたちはそのままが一番。功乃ちゃんはモリモリ働いて、功介はモリモリ勉強しなさい」

「はいっ」

「はあい」

「じゃあ、またね」

そう言つて、オレンジ色の人形師さんはどこかへ行つてしまつたのでした。

数日後。

また橙子さんと青子さんが、揃つて宮本の屋敷を訪れたらしく。

阿鼻叫喚を報せるメールが父から届きました。

こういつたメールは跡継ぎの功介に送つてください、と返信しておきました。

七話 眼鏡

我が姉、宮本功乃にはいくつか妙なクセがある。

寝言がうるさいとか。

気まづくなると頭を掻くとか。

塗ったマニキュアの匂いを嗅ぐとか。

興味のない話題になると頬杖をつくとか。

我ながら、なぜ知っているのか不思議であるけれども、そういった様々なクセを姉は持っている。無くて七癖、なんて言うけれど、そんな可愛らしいものではない。

そしてその最たるものが、「なんかヘンなもんを買ってくる」である。

「失礼な。これはヘンなもんじゃないでしょ」

「ヘンだよ」

金曜日の夜。

今宵姉が買ってきたものは、伊達眼鏡であった。

姉の視力は両目とも一・五を超えている。度入りの眼鏡を掛ける必然性も必要性もない。だからこそ伊達眼鏡なのだろうが、なぜわざわざ買ってきたのか。

ちゃぶ台に置かれた眼鏡をしげしげと眺める。至極シンプルな黒縁眼鏡だが、その黒は上品な光沢を纏い、細身のフレームながら存在感がある。

「これ、お高いんでしょう」

「むふふ、諭吉さんお一人分です」

「ぐは」

なんたる浪費。

「なんで買ったの」

姉が自分の給料から払っているのだから、文句をつける筋合いではない。けれど、純粹に理由が気になる。

「トーコさんの眼鏡の真似を試してみたくなってね」

「ぐほ」

なんたる暴挙。

橙子さんの掛けている眼鏡はただの眼鏡ではない。外的性格のスイッチであり、そして魔眼殺しだ。とてつもない魔術品である。

「そんなの無理でしょ。とかかねーちゃん、魔眼なんてないじゃん」

「あるわよお。めちやくちや格は低いけど、一応浄眼持ちよ、あたし」

そういえば、幽霊が見えるんだった。

「ただの靈視でしょ」

「根っこは淨眼らしいの。お父さんが言ってたんだから間違いないわ」

「ふうん。で、その眼鏡を靈視殺しに改造するの?」

「そう。あたしの淨眼程度なら出来るかなって。で、ついでに性格のスイッチも仕込もうかなと」

「それこそ無理だって。どうやるのさ」

「そう言うとは故か姉は胸を張った。」

「トーコさんから直接聞いたわけじゃないけど、多分あれは自己暗示の一種だと思うの。眼鏡を掛けるかどうかで暗示を発動させて、外側の人格だけを変えてるんじゃないかな」

「はあ」

「だから、あたしもサバサバとオシトヤカをスイッチしてみるかな、って。ほら、仕事のときとか便利じゃん」

「まあ、確かに」

「というわけなので、この週末は工房使わせてもらおうね」

「うん、姉ちゃんの家なんだから、そこは好きにしていと思うけど……」

「うん?」

「いや、その、ねーちゃんがちゃんと魔術やるの、なんか久々だなんて」

姉は大学に通いだしてから、魔術をめつきりやらなくなってしまうた。

軽音サークルに入ったりオカルトサークルに入ったりとバタバタしているうちに、なんだかめんどくさくなってしまうたようだった。たまに思い出したように工房を使っているが、いらぬ書類を焼却してみたりして、腕が鈍らないようにする程度だ。

姉が魔術を研鑽しなくなったのは、僕が家督を継いだせいじゃないかとも、たまに思ってしまう。

なので、こうやって姉が自分から魔術を使おうとするのが、ちよつとだけ嬉しかった。

「……うん、眼鏡作り、がんばってね」

「およ、コースケが優しいつ。明日は雨かつ」

大袈裟に後ずさる姉。

「まだ梅雨は明けてないから、降ってもおかしくないかな」

「そーゆー意味じゃないつてば。……でも、ありがと。お姉ちゃん、頑張るね」

そう言つて、姉は工房へ向かった。

そして、日曜日の朝。

「わっしょーい」

という奇声で目が覚めた。

声は工房から。防音の結果があるはずなので、声の主は部屋の外か。

「どしたの」

部屋のふすまを開けると、工房の前に両手を上げ仁王立ちする姉が居た。

「出来たのよ、トーコさんの眼鏡もどき」

「マジ?」

高々と掲げられた右手には、先日姉が購入した黒縁眼鏡が握られていた。

「トーコさんのとはたぶん構造からして全然違うんだろーけど、そこはそれ、結果さえ良ければ全て良しってね。霊視殺しと外的人格の切り替えはバッチリよ」

自慢気にその右手を僕に差し出す姉。手に握られた眼鏡には、確かに魔力の残滓が感じられる。

「ま、霊視殺しはお父さんから材料もらって再現しただけ。性格のスイッチも元からやってたから、眼鏡を掛けるって動作で発動する暗示だけでよかったわ」

姉は目元に隈をびっしり走らせたまま語っている。

それにしても、まさか本当に作るとは。

「じゃあ、掛けてみてよ」

「うむ、良かろう。職場モード、起動っ」

シャキン、と眼鏡を掛ける姉。

「……………」

「……………」

満ちる、無音。

「…………コーくん、その、話しかけてもらわないと、わかんないと思います」

「へ」

違和感が全身を駆け巡る。

何か、何かが決定的に違う。

「コーくん?」

少しうつむき、姉が上目遣いに僕を見る。自信なさげに手のひらを合わせている。

「……………」

まず、僕の呼び方が、なんだか乙女チックになっている。

所作もなんだかモジモジしている。

そしてなにより、あのいつもの気丈さが霧のように消えている。

まるで、まるで、まるで臆病なか弱い少女のよう。

「すつ、すごいよねーちゃん。ホントに性格変わってる」

「でしょう? お姉ちゃん、頑張ったんですから」

えへへ、と笑う仕草さえ、弱々しげで、なおかつ品がある。

「うわあ、職場だといつもこんな感じなんだ」

「うーん、ちよつと、やりすぎちゃいました。けど、これくらいしなきゃやる意味ないかなって思ってたんです」

「そう、だね」

でも、何か、もつと何かへんな感じがする。

なんだろう。

「どうかしました?」

「それだつ」

「はい?」

きよとん、と僕を見るその顔に、違和感の正体をつきつける。

「敬語の必要はないでしょ」

眼鏡を掛けた途端、何故か姉は弟である僕に敬語で接していた。それがなんだかとてもへんな感じがしたのだ。

「それはまあ、そうなんですけど……。さっきも言いましたけど、ちよつとやりすぎちゃったんです。なんかこう、私の女の子らしさが全開になっちゃいました」

「うわあ」

自分で自分の女の子らしさを語ってしまふあたりは、間違いなく宮本功乃その人である。

「うん、まあ、根っこはねーちゃんのままだから、とりあえず成功してるんじゃないかな」

「あはは、コーくんにそう言ってもらえると嬉しいです。頑張った甲斐がありました」
につこり笑うその顔も、見たことの無い表情だった。

一体、どんな暗示を使ったのやら。

「じゃあ、私は疲れたのでちよつと休ませてもらいますね」

そう言つて部屋に戻ろうとする姉に声をかける。

「あ、待つてねーちゃん」

「はい？」

「ええと、その……、家にいる間は、眼鏡を外してくれると、助かるかなつて」

橙子さんをお願いしたのは真逆のことを、姉に言った。

「あら、眼鏡を掛けたお姉ちゃんは嫌いですか？」

ふふふ、と笑いかけるその姿はどことなく妖艶にすら見える。

「嫌いつてわけじゃないけど、そんなんじやこつちが落ち着かないよ」

僕のその言葉に、姉は納得したように頷いた。

「うん、それじゃ、ちよつとずつ慣れてもらいますね」

それだけ言つて姉はふすまを閉じてしまった。

「……なんでさ……」

完全に目が覚めてしまったので、お茶を淹れることにした。

台所でお湯を沸かしながら、姉の作ったあの眼鏡について考えてみる。

とんでもない変化だったが、しかしそれは姉の暗示が完璧に成功したことを示している。「霊視殺し」もどうやらできているらしい。

姉が魔術をしつかり行使したのは久方ぶりのはずだ。そのくせに、あの橙子さんの眼鏡を簡易的に再現できていた。

姉は昔から、魔術に向いていないわけではなかった。我が家の当主は代々男子が継ぐ定め故に家督が僕に譲られることになったわけで、魔術師としての才が姉より優れているということはない。

僕は魔術回路の数こそ姉より多いが、その差は僅かだ。こと魔力の扱いに関しては姉のほうが上を行っている。本人は気づいていないらしいが、きちんと鍛錬すれば僕なんかよりよほど、魔術師として大成するはずなのだ。

それでも、当主の座は僕に与えられ、姉は現代人として生きる道を選んだ。

ならば、姉が魔術の研鑽をやめてしまったことに、僕が口を出す資格はない。

「わ」

知らぬ間に沸騰していたのか、ヤカンが音を上げていた。慌ててコンロの火を消して、急須に湯を注ぐ。

湯のみをふたつお盆に載せて居間に戻ると、隣の姉の部屋から豪快ないびきが聞こえてきた。どうやら、寝るときは眼鏡を外しているらしい。

「つて、そりやそうか」

湯のみのひとつにお茶を注ぐ。

とほとほ。

ごーごー。

お茶がたてる水音と、姉のたてるいびきが、妙なハーモニーを奏でていた。

八話 暗示

昨日完成した「橙子さんの眼鏡もどき」の出来は上々です。

そこらじゆうをふよふよしている浮遊霊の皆さんを見ることはほとんどなくなりまして、眼鏡を掛けている間は意識せずともおしとやかな自分で居られます。

幽霊を見るのも、おしとやかに振る舞うのも、どちらもとても疲れることだったので、今掛けているこの眼鏡のおかげでその両方から開放されました。

ビバ・橙子さん。

直接作り方を教わったわけではないけれど、たかが眼鏡で性格を切り替えるなんて常人の発想ではありません。

あとなぜあんなに若さを保てるのか、という謎も、そろそろ解明しなければなりませんね。

私よりも一回り以上歳が違うはずだというのに、あの若々しさ。もはやそれこそ魔法の域な気がしますけれど、美容テクニクをフルに活用すればそれに近いことが可能なようなので、彼女自身のたゆまぬ努力の血晶なのでしょうか。

「それにしたってあれはなあ」

くるくるとパスタを巻いていると、つい言葉がこぼれてしまいました。

「なにか言った？」

一緒に昼食を摂っていた同僚の、訝しげな声。

「ううん、なんでもないよ」

それに、笑顔を返して誤魔化しておきました。

同僚の名前は春田はるた初乃。彼女は大学の頃からの友人で、同じ字を名前に持っています。仲良くなったきっかけはまさにその「乃」の字のおかげで、そうでもなければ、こんな女の子と仲良くなることはなかったかもしれませぬ。

彼女は兎にも角にも、女の子らしい女の子です。普通の家庭に生まれ、普通の環境で育った、ちよつとおつとりした箱入り娘。本当に箱入り娘として育てられたわけではないのですけれど、雰囲気がなくなく箱入り娘っぽいのです。

可愛くて、おとなしくて、真面目で、か弱くて、それでも芯はしっかりしていて、およそ女の子に必要とされる要素は網羅していると思われませぬ。趣味はお菓子作り、特技は裁縫。ここまで徹底していると、親御さんとか何者かの意思を感じる気がしますけれども、彼女はふわふわと生活しながら、自らの意志でそれらの要素を身に付けてきたのです。

でも。

「はっちゃん、カレシできないよねえ」

「うう」

そうなのです。初乃（私は「はっちゃん」と呼んでいます）はどういうわけか恋人が居たことが無いのです。

そのへんも含めて「女の子らしい」のですけれど、彼女がモテないわけではありません。

はっちゃんは学生の頃から超モテモテです。職場の男性陣はほぼ皆彼女の癒やしオーラにメロメロです。そして私の無言の圧力に怯えているのですが、それは置いておきます。

「そろそろいいんじゃないの」

「そろそろ何も無いけど……。なんか、こわいなあつて」

彼女に恋愛願望が無いわけではありません。無いどころか、その溢れんばかりの恋する乙女オーラは、私をも圧倒するほどの質量を持って彼女の周囲をふよふよしています。

ただ、意中の人がいても、自分からアタックをかけることが出来ないらしいのです。学生時代は恋路を外れそうな彼女を全身全霊で引き回した結果、私が恋路を外れてしまいました。

「なんかこわいなあつて、別になにもこわくないよ」

スプーンとフォークを使って丁寧にはスタを巻くはっちゃんは、しょんぼりしながら私の言葉に返事をしました。

「だって、みんなカレシがどうのこうのつて愚痴ばかり言ってくるんだよ。楽しいこともあるみたいだけど、それならわたしは、優しい男の人とお友達で居れたらいいよ」

「はっちゃんは聞き上手だもんねえ。そーいうの、まだ言われるんだ」

「まだ、どころか、最近どんどん増えてるよ。どうしよう」

「そりやどうしようもないね」

「うう」

はっちゃんが食器を置いてしまいました。あんまりにも話しやすいので、ついつい口が滑ってしまいます。

「ごめんごめん。うーん、そうだなあ、はっちゃんのそういう愚痴を言える相手が、カレシなんだと思うよ」

「じゃあコトちゃんがカレシになるけど」

「あーもうそれでいいわ、あたし」

「世間体がそれを許さないよ。あと弟くんとか」

「確かに」

ガールズトークが盛り上がりを見せてきたあたりで、店内の時計が休憩時間の終わりを虚しく告げようとしていました。

「コトちゃん、早く食べなきゃ」

「うげ、マジか。今日休憩入るの遅かったからなあ……。クソ課長め、話が長すぎるつての」

「そういうことは言っちゃいけません」

「はいはい」

「ずぞぞぞぞ、と勢い良くパスタを食べる私に対し、はっちゃんは相変わらず丁寧な仕事でパスタを巻いています。」

「はっひゃん、ふぁにあふあなふなふよ」

「え？ ……ああ、大丈夫、間に合うよ」

確かに彼女の皿の上にある明太子パスタは空になりそうでした。

「まほーみたい」

「えへへ」

「戻りましたあ」

「同じく」

「おう、ちゃつちやか働けー。宮本、これコピーな。二十でいいから」

「はい、分かりました」

課長から数枚の資料を受け取り、コピー機を動かします。

私やはつちやんの仕事はこういった書類の準備やらお茶くみやら、一昔前のOLのイメージそのままの仕事です。「うわあドラマみたい」なんて二人して言っていましたけれど、こんなことばかりやるのもなかなかツライですね。

とは言え、最近では違う仕事も増えてきました。資料をただコピーするだけだったが、校正を頼まれるようになり、数字を打ち込むようになり、そろそろ文章まで作るように頼まれそうです。

お仕事が増えるのは良いことです。けれど、やつぱりまだまだOLらしい頼まれごとが多いです。

ぐいんぐいんとコピー機を回していると、コーヒーを淹れていたはつちちゃんがトコトコとこつちに来ました。

「ねえ、コトちゃん」

こつそり、周りに聞こえないように耳打ちするはつちちゃん。

「はい？」

「眼鏡なんて、急にどうしたの」

「む」

さすがははっちゃん。学生時代からの友人は、やはりお目が高いですね。

「なんて言いますか、仕事効率アップのおまじないみたいなの」

「あはは、変なの」

手を口に当てて笑う仕草は、やはり女の子らしいです。女子力ってヤツで言えばきつと五十三万はありますね。

「それ、弟にも言われました。みんなひどいです」

「だって、敬語使うのはヘンだもん。なんか距離があるみたい」

「そう言われると、ちよつと言葉に詰まってしまいます。」

「……やれやれ」

掛けていた眼鏡を外し、はっちゃんに向き直りました。

「ほれ、これでいいかな？」

「うんっ。コトちゃんは、そうじゃないと」

満足したふうにはっちゃんは振り返り、デスクへと向かっていきました。

「お疲れ様です。コーヒーですよー」

「おお、ありがとう初乃ちゃん」

「いえいえ、あ、課長もどうぞ」

「ああ、そこに置いておいてくれ。うん、ありがとう」

明るくコピーを配るその姿は、さながら妖精のよう。

「……いいなあ」

私の眼鏡の暗示は、本当は彼女のようになりたくて掛けたのですけれど。少時間違えてしまったようです。

とんとん、とコピーした資料を揃えます。

「これでよし」

さっきの、はっちゃんの言葉。

眼鏡の暗示がキツすぎたのでしょうか。

弟やはっちゃんをはじめ、職場で働く人々も、ちらほらと「眼鏡を掛けた私」に違和感を感じていました。それだけ、私のことをよく見てくれているということなのでしょう。

個人的には眼鏡を掛けている自分の方が、本来の自分に近いと思っています。弟に「それはゼツタイ無いよ」なんてひどいことを言われてしまいましたけれど、ここは譲れません。

でも、さすがに家族や友人に敬語を使ってしまうのはやりすぎでした。ちよつと調整

しないといけませんね。

「課長、コピーです」

「おう。あ？ 眼鏡はどうした」

「レンズが外れました」

「何言つてやがる、お前のは伊達だろうがよ」

びつくりです。まさか課長が私の視力を把握していたなんて。

「よくご存知ですね。その通りです」

「ふん、中間管理職このしごとつてのは、上も下もよく知つとらにややつてられねえの」

デスクに置かれたディスプレイとにらめっこしながらそう言う課長の顔には、なんとなく、疲れ、のようなものが見えました。

確か課長はそろそろ五十歳。

「タイヘンですねえ」

「お前にそう言われるようじゃ、そろそろやべえか」

「む、セクハラですか」

「全然違えだろ」

「あはは」

「……おら、自分のデスク戻れ。次の資料送ったから、次の会議までに仕上げとけよ」

「なんの資料です?」

「見りや分かるだろ。行つてこい」

「はあい」

どさりと書類を置き、自分のデスクのパソコンを見てみると、この課の今月分の売り上げのデータと、先月の収益報告が来ていました。「先月との比較データを作ること」という課長からのメッセージ付きで。

「わお、あたしなんかがやっていいの、これ」

ちらりと課長に視線を送ると、謎の頷きが帰ってきました。

「……よし」

信頼には、応えなければなりませんね。

「ただいまあ」

がらつと玄関を開けると、弟が出迎えてくれました。

「お疲れ様。晩ごはん、できてるよ」

「うはーうれしー」

毎度のことながら、こうやってご飯を作って待っていてくれる人がいるというのは、とてもありがたいことです。

「あれ、どうしたの？　なんか疲れてない？」

弟が心配そうに私の顔を見つめてきました。どうやら私は、このおっとり野郎にもわかるくらい疲れた顔をしているようです。

「今日はちよーつとタイヘンでね。それから、眼鏡の暗示、弱くしなきや」

パンプスをぐいぐいと脱いでいると、弟が意外なことを言いました。

「だろうね。僕がやろうか」

「できんの？」

「どうせこうなるだろうと思ったから、暗示の勉強しといたんだ。大学生はヒマだからね」

「うわあああ、出来る弟を持ってお姉ちゃんしあわせだよお」

愛のこもったハグをしようとおもったら、ひらりと避けられてしまいました。

「はいはい、先にご飯食べよう」

「今日はなに？」

「ハンバーグだよ。どうせ眼鏡のことで疲れてると思ったから」

「あーもう泣きそう。泣いていい？」

「ご飯食べてお風呂入ったらね」

「うおオン」

「うわあ」

橙子さんの眼鏡の再現は、やっぱり難しいです。

けれども、弟は毎晩工房でナニヤラ鍛錬をして、魔術の腕を磨いています。もちろん、大学の勉強をこなしながら。その腕前は、先日弟が張った「ルーンの結界」でよくわかっています。橙子さんが封印指定モノ、なんて言っていたあの術も、どんどん使いこなしていくでしょう。

なら、姉である私も負けてはいられません。

弟がやってくれるといった暗示の調節は、やっぱり私がやることにしました。わざわざ勉強してくれた弟には悪いですけど、こんなところまで弟に頼っているのはダメなお姉ちゃんになってしまいます。

「もう十分ダメだよ」

「なにをう」

たかが暗示、されど暗示。

加減ひとつで全てが台無しになってしまふ、単純なだけに強力な魔術。

我が家の魔術特性とは噛み合いくいけれど、だからこそ弟ではなく、私が学ばなければ。

弟は防衛の魔術だけを研鑽して、私はそれ以外を研鑽する。きっと、それが正しい姉わたしたちと弟の在り方です。

なんだか、もりもりとやる気があふれてきました。

「うむ、あたしは頑張るよ」

「え？ う、うん、頑張って」

「おうともっ」

戸惑った弟の顔に、満面の笑みを送りました。

九話 誕生日

七月二十五日、土曜日。

今日は我が姉、宮本功乃の誕生日である。

誕生日というものは、ハタチ前後を境に途端に興味がなくなるものらしい。僕自身、自分の誕生日をいついっ忘れがちになる。

姉もその例に漏れず、橙子さんに指摘されるまで、今月が誕生月であることすら忘れていた。なので、今日が自分の誕生日であることを覚えてるか怪しい。怪しいけれどそこはそれ、同居人としてきっちり祝ってやらねばなるまい。

ということ、ひとりで昼食を摂ったあと、普段では絶対に入らないようなおしゃりなケーキ屋にやってきた。

「うわあ」

店内に入り、その値段を見て愕然とする。安ければワンホール買っちゃおつかな、などというチョコラテのように甘い考えは、そのままトロつと溶けてしまった。

ケーキと言ってもいろんな種類がある。ショーケースいっぱいには広がるその甘味を見てみると頭がだんだんくらくらしてきた。何だかもうどうでも良くなってきたので、

イチゴのショートケーキニピースでいいかなあ、なんて決めかけたところで、ポケットが振動した。

「うん？」

ショートケースから離れて、スマートフォン画面を見る。姉からのメッセージだった。

『今晚友達がひとり来るみたいだから、ご飯作つといてー。ちょーカワイイ子だから、惚れろよ』

「……………」

わかった、とだけ返信し、スマートフォンをしまう。

「すみません、このショートケーキをみつつ、お願いします」

夕飯の食材を買い足して、家路に戻る。

姉も良い友達を持ったものだ。誕生日を祝いに家まで来てくれるなんて、このご時世では珍しい気がする。

それも大学生ならまだしも、社会人になつてもそういう友達が居るといのは僥倖と言つてもいいだろう。姉の人徳のなせる業かと思つたが、その友人の人徳のほうがスゴイ気がする。

さて、どんなひとだろう。

さっきの姉からのメッセージを信じるなら、女性なのは確かだろう。姉が男友達を家に招くとは考えにくい。そんなことをするのなら、もう友達ではなく恋人である。

女性であり、素の姉を受け入れるほど懐が深く、カワイイ。

なぜか、あの眼鏡を掛けた姉の姿が脳裏をよぎった。

なんだか話が大きくなってしまった。

最初は、コトちゃんの誕生日をお祝いすべくどこかレストランにでも行こうと思ってた。だけど、こともあろうか彼女は、今日が自分の誕生日であることを認識していないようだった。

昼休憩のとき、それとなく探りを掛けてみた。

「今晚、どこかでお食事しない？」

「え、なんで？」

うどんを頬張ったまま問い返す同僚。どうも、本当におぼえてないらしい。その瞬間私の頭に浮かんだのは、「サプライズをしよう」ということだった。

「ええと、うん、ほら、弟くと会ったこと無いから、どんな子なのかなーとおもって」

「あー。なに、キョーミあるんだ？」

「うん、ちよつと。良かったら、コトちゃんの家にお邪魔させてもらえたら嬉しいな」
「いーよいよ。じゃあコースケに晩ごはん作つてもらおうね」

そう言つて、スマホを取り出すコトちゃん。弟くんにメッセージを打っているようだった。

「うん、ありがとう。急にごめんね」

「あはは、いいっていいって。……えーと、ちよーカワイイ子だから……」

「そ、そんなこと書かないでっ」

「あは、送っちゃったあ」

ぺろりと舌を出すコトちゃん。

やれやれ、とため息をついたけれど、彼女のこういうところが好きだった。

いろんな障害、苦難を正面突破していく、凛々しく力強い女の子。

綺麗で、気が強くて、真面目で、男の人に負けない女性。

私の持つていない全てを持つているともだち。

なんで私みたいなのがこんなすごいひとと友達でいられるのか、てんでわからないけれど、人生というのはそういうものなのだろう。

なら、せめて今日みたいな特別な日は、恩返しをすべきだと思う。

「ただいまあ」

「お邪魔します」

がらがらと開かれる玄関の扉。

「え、早っ……」

台所に掛けられた時計は、ちょうど一八時を指している。手早く手を拭って玄関へ。

「おかえり……と、いらっしやいませ」

「ありや、ちよつと早かったかな」

エプロン姿の僕を見て、何をしていたか察したらしい。

「うん、あと三十分くらいで出来るかな」

「わかった、じゃー居間で待つてる。あ、こっちは同僚の春田初乃ちゃん。大学同じだったんだ」

「こんばんは」

姉の影からおずおずと首を下げる女性。

「あ、はい、こんばんは」

「どーだ、カワイイだろう」

「もう、何言ってるの」

「あはは」

言うだけ言つて、姉と初乃さんは居間に入つていった。

「……………」

姉のメツセージを思い返す。

『——ちよーカワイイ子だから、惚れとけよ』

……姉の言葉に、嘘はなかつた。

「よし」

献立は姉の好物である洋食。ピラフと、シチューと、ちよつと奮発して牛肉のステーキ。

盛り付けを進めていると、後ろでふすまが開く音がした。

「こんばんは」

振り向くより早く投げかけられる、今晚二度目の挨拶。

「は、はい、どうも」

初乃さんが台所に来ていた。

「うわあ、やっぱり」

「え？」

何がやっぱりなのかわからず、つい問い返してしまった。

「今日はお姉さんの誕生日だから、こういうメニユーなのかなって」

「ああ、そうです。全部姉の好物です。なんかバラバラなメニユーですけど、まあ細かいことは気にしないひとですから」

僕の皮肉を聞いて、初乃さんは笑った。

「うん、そうだね。……じゃあ、コトちゃんやんが誕生日に気づいてないのも、わかってる？」

「確証はなかったんですけど……やっぱりそうなんですか」

「うん。だからね、私も一緒にご飯運ぶから、はっぴーばーすですーつ、ってやらない？」

両手をぱつと広げ、爛々と目を輝かせて提案する初乃さん。

こんな顔で頼まれてしまったら、断れるわけがない。

「わかりました。じゃあ、こっちのお盆にステーキ載せるんで、お願いします」

「はい」

僕が言わずとも、気を利かせて皿にステーキを盛り付け、いそいそとお盆へ載せていく。

「……………」

姉とはまるで真逆である。

いつだったか、友人であれ恋人であれ、性格が正反対であるほうが関係が長続きしやすい、なんてことを聞いた気がする。

目の前の居るこの女性は、まさにその体現者だろう。

「……姉がいつも、お世話になってます」

「へっ？」

「なんでもありません。行きましょう」

初乃さんはきよとんとしたまま、ステーキの載ったお盆を持っていた。

「はっぴー」

「ばーすでー」

がらつと居間のふすまを開くと、「は？」なんて顔をした姉が寝っ転がっていた。

「は？」

訂正。口に出していた。

「……ねーちゃん、生年月日は？」

「えつと、へーせー三年、七月二十……あれ？」

「今日だよ、コトちゃん」

ほかーんと天井を見ながら指折り数える姉を放って、テーブルに皿を並べていく初乃

さん。

さすが、姉の扱いに慣れている。

「あー、それではっちゃんあんなこと……わー、ありがとねえ」

「えへへ」

「うっわ、このピラフうまつ。さてはこれ、冷凍じゃないな」

「うん、試しに手作りしてみたんだ」

「すごいね功介くん、お料理出来るんだ」

「姉がこんなんですから」

「なるほど」

「わっはっは」

「コトちゃん、今のは褒めてないよ」

「うむ、知っておる」

姉は眼鏡を掛けず、いつもの素のまままで接している。それだけ仲が良いということだろう。

けれどそれは、眼鏡の有無を確認するまでもないことだ。姉と初乃さんは正反対のキャラクターのまま、反発することもなく、お互いがお互いに気負いせずに話している。

理想の友人関係というものがあるとすれば、まさにこれだろう。

「ねーちゃん、初乃さんとはどうやって友だちになったの？」

「お、いい質問ねえ。よーし、おねーちゃんが答えてあげよう」

ステーキの最後の一切れをぱくんと放り込んで、姉が語り始めた。

「あたしが大学のオカルトサークルに入ったのは知ってるよね？　ま、すぐに辞めちゃったけど、はっちゃんとはそこで知り合ったの。ハツノって名前は、ハジメテの初に、コトノの乃って書くんだけど、同じ乃の字ってことで先輩にひとくりにされちゃったんだ。あときは、わあーすごい女の子だあ、って、仲良くなれないと思っただけで、不思議なもんよね、今じゃこんなに仲良くなっちゃった。それがきつかけかな」

「コトちゃん、アレもあるよ」

「ん？　ああ、そうそう、はっちゃんもあたしもユーレイ見えんのよ」

「え、ほんとに？」

初乃さんを見ると、恥ずかしげに頷いていた。

「あたしより上、Bランクくらいに靈視かな」

姉のその言葉に、初乃さんが不審げな顔をした。

「びーらんく？」

姉は顔をしかめている。

「あー、えーと、むー……」

言い訳のしようがないほど、完璧に口を滑らせている。霊視だのランクだの、魔術用語をサクツツと言ってしまうからだ。

「あー、もー、コースケ、言っちゃっていいかな」

「え、言っちゃって……えっ」

「はっちゃんは口堅いし、信頼できるし、あたしたちもそういう話ができるヒト、そろそろ欲しいでしょ」

「むう」

ピラフを運んでいたスプーンを置き、腕を組む。初乃さんは、雲をつかむような僕らの話についていけない。

「……………」

姉は誰にでも信頼を寄せるほど、軽い人間ではない。むしろここまで信頼を寄せることは珍しい。それこそ、橙子さんと同じくらい、大事に接している。

「……初乃さんがそんな霊視持ちなら、それもいいかもね」

「よっしゃ」

霊が見えるというのは、そこそこ珍しい能力ではあるが、希少なほどではない。だが、

Bランクともなれば見たくないものまで見えてしまうだろう。

そういつたことをしつかり相談できるようになれば、初乃さんも少しは気が楽になるのではないか。

「じゃあ、コースケが言つてやつて」

「なんでさ」

「コーユーコトは当主がやらんと、ほら」

「??」

初乃さんがいつそう不思議そうな顔をして僕を見ている。

「……ええと、今から嘘みたいなこといいますけど、ホントのことです。あと、誰にも言わないでくださいね」

「う、うん」

何か決心したように頷き、身構える初乃さん。

「僕らは、魔法使いなんです」

「——ということで、僕は宮本家の跡継ぎつてことになってます」
「なるほど」

初乃さんは拍子抜けするほどアツサリ僕らの話を信じてしまった。

「……え、ええと、今言ったこと、全部、ホントですからね」

「うん、わかってるよ。だからこのお家には、幽霊さんが居ないんだね。こういうお屋敷にはだいたい居るもんなんだけど」

納得したように頷く初乃さん。

「さすがはつちゃんね。気づいてたか」

「うん、だって、みんな玄関先でふわふわしてたから」

「へ」

その言葉に、姉の顔が青くなった。

「え、えつと、それ、ホント、ですか」

たぶん、僕も同じ顔をしている。

「うん。……あれ、コトちゃんは、見えてなかったんだ」

「う、うん……」

申し訳無きそんな顔をする初乃さんに、姉が答える。

「はつちゃんの霊視はBランクくらいだと思うけど、あたしはせいぜいCマイナスくらいなの。文字通り、格が違うから、見えるもんも違うんだねえ……」

「Bってすごいのか？」

「ええ、すごいですよ。Aが一番上で、その次ですから。幽霊って概念のものなら、ほと

んど視えるはずです」

「うわあ、どおりでいろいろ見えると思った」

すごいなあ、なんて他人事のように感心する初乃さん。

「あ、そうだ。あたしの眼鏡、効くかな？」

「（そ）そと取り出したのは、先日作った霊視殺しだった。

「それって暗示かかってるんじゃないの」

「この暗示はあたしにしか効かないから大丈夫。はっちゃん、これ掛けてみ」

「う、うん」

不安げな表情のまま眼鏡を掛けると、途端に彼女の顔色が明るくなった。

「うわあ、すごい。見えなくなったあ」

「……………え？」

はしやく初乃さん。

対して、またしても固まる宮本姉弟。

「は……………はっちゃん？ さっきまで、何が見えてたのかな……………？」

「え？ あっ……………」

両手の指先で眼鏡を支えたまま、しまった、という表情をしている。

「……………」トちゃん、私ね、世の中には、知らないほうがいいことっていうのも、ある

と思うな」

「オツケーはいオツケーです。だいじょーぶ、うん、あたしもそーおもうわ。やー気が合
うねーやっぱねー」

おずおずと眼鏡を返す初乃さん。

必死の形相でピラフをかきこむ姉。

とんでもないパーティーになってしまった。

「はっぴばーすでー、とうーゆー」

お決まりの歌を、三人で歌う。

ひと切れのショートケーキに、「2」と「4」のカタチのローソクが刺さっている。

ちなみに部屋の電気は姉の意向で点けたままだ。理由はまあ、言うまでもないだろ
う。

「はっぴばーすでー、こつとのー、はっぴばーすでー、とうーゆー」

「ふうふううっ」

全力で火に息を吹きかける姉。その勢いでショートケーキが倒れてしまった。

「わお、なかなかやるわね、あたし」

「加減してよ、ねーちゃん」

「あはは、これはあたしが食べるから、気にしないで」

ちやぶ台の真ん中に置かれた皿を、姉が手元に引き寄せる。

「いったただつきまーす」

「いただきます」

「いただきます」

果たしてこのセリフは、このタイミングで言うものなのか。とりあえず姉に従っておく。

「うーん、おいしいねえ。久々に食べたわ」

「そうなの？　なんかたくさん食べてそうないメージあったよ」

「こんなもんしょっちゅう食べてたら太るってば。ねー、はっちゃん」

「そうだよ、太っちゃうよ。私も一時期ちよつと危なかつたもん」

「うわ、マジで？　あ、あれか、半年前の」

「わーわーっ」

赤い顔をして姉の口をふさぐ初乃さん。

とても気になる。

気になるけれども、なんというか、聞かずとも分かる気がした。

「もう、その話はだめだよ」

「てへ。じゃあさ、コースケとか、どうよ」

無意識に初乃さんに視線が向かう。

勿論、目と目が会う。

「か、からかわないでよ、ねーちゃん」

「えー？ コースケも彼女できないんでしょー」

「それとこれとは話が別だってば」

「そうだよ、そーゆーこと言っちゃいけません」

一二対一。軍配は僕と初乃さんに上がる。

「息びつたりじゃん」

「だから」

「もう」

時刻は九時。夜は更けていく。

「それじゃ、お邪魔しました」

バスの便が無くなってしまいう前に、初乃さんは帰ることとなった。

「今日はありがとうね、はっちゃん」

「ううん、こつちこそ急にお邪魔してごめんね。功介くん、ご飯、おいしかったよ」

「はい、ありがとうございます」

「なんだか最近、似たようなことを言われた気がした。

「ばいばい。今度、霊視殺し作ってあげるねー」

「うん、楽しみにしとくねー」

「元気に手を振りながら、初乃さんは夜の闇に消えていった。

「……Bランクの霊視殺しなんて、ねーちゃん作れるの」

「……努力します」

ふと、初乃さんの言葉を思い出した。つい、玄関をきよろきよろしてしまふ。姉も同じことをしていたのか、目が合った。

姉きょうだい揃そろって、いそいそと玄関から立ち去る。

無自覚な霊視とは、いやはや恐ろしいものである。

十話 帰省

音もなく、そろり、と船が動き出しました。

潮騒が少しずつ遠くなり、軌跡を示す白い泡が、後ろに続きます。

「いい風だね」

弟の声。他に聞こえるのは、船が海を割る音と、ゆっくりと流れる空気の音。

となりで手すりを握っている弟の髪をさらりと風が撫でていきました。

周りに満ち、けれど不快ではない、海のおい。

港は遠くへ、あたりは一面の紺碧に。

上を見れば、もくもくと白い雲が立っています。すこし目をずらすと、さんさんと輝

く大きなおひさま。

そしてその周りに広がる、澄んだ青。

「ふむう」

何度も見た景色。けれど、最後に見たのはいつだったのでしょうか。

嫌いだ嫌いだと言っていたけれど。

こうやって実際に見てみると、その、案外悪くないもの、なんですね。

「去年は結局帰らなかつたから、まるつと一年半ぶりかな」
ぼつりと弟がつぶやきました。

「そーねえ。なんか、久々ね」

ほう、と、姉弟揃つてセンチメンタリズムに浸っていると、ほどなくして船は島へたどり着きました。

船での移動はおよそ十分程度。大した距離ではないので、アツサリ着いてしまいません。

「橋でも架ければいいのに」

「それじゃ風情がないよ、ねーちゃん」

「ま、それもそつか」

船は停泊し、栈橋にどつとヒトがなだれ込みました。

「うわ、人多いね」

弟が呆れたような声を上げています。

「そりやそうでしょ。夏休みだもん」

かつかつと鉄の階段を降りてみると、もう殆どの人が下船していました。屋根のある栈橋は人混みでごった返しています。

「帰ってきたんだねえ」

「そうねえ」

今日一日だけです、私達姉弟は実家に帰省してきたのでした。理由は単純で、誕生日くらい帰って来い、と言われたからです。けれど。

「わざわざ誕生日ってだけで呼ぶかしらん」

「そうだね、ちよつと怪しいね」

訝しげな顔をした弟。考えることは同じようです。

「まっ、帰りや分かるでしょ。取って食われるわけでもなし」

「……うん、そうだね。そうだといいいね」

「むっ？」

弟は眉を寄せたままです。

はてさて、何が起きるのやら。

人混みを抜け、棧橋から脱出しました。

木々の立ち並ぶ石畳の広場は、ツアー客とシカでいっぱいです。右には欧米人、左には老人会。その他モロモロの観光客が、シカに餌をやったり、座り込んで休憩したりしています。

私達はまっすぐ家に帰ろうか、と思ったら、

『せっかくだから観光してきなさい。昼過ぎくらいまで』

などといういかにも怪しいメールが、父から届きました。

「これ、は」

「ゼツタイ、何かあるわね」

確定です。どんな厄ネタだか知りませんが、ともかく後ろめたいことがあるのは間違いないありません。

「観光って言っても……、水族館でも行く？」

「なーにが悲しくて弟と水族館デートしなきゃなんないのよ」

「そう言われても」

「どっちみちこの辺はあんまり来たことないんだし、神社行って、おみやげでも買いましょ」

「……うん、そうだね」

ふと。

目の前には、かき氷の出店があります。

「……」

「……」

交差する視線。

どちらからともなく、そのかき氷屋に近づいていきました。

フェリー乗り場から神社までは、一本の街道で繋がっています。

「うーん、風が涼しくていいわねえ」

「そうだねえ」

海沿いのその街道は、人通りは多いものの海風のおかげでとても爽快な気分にならせてくれます。

木々のざわめきと、打ち寄せる波の音。土を踏む足音。

それに紛れてかき氷をシヤクシヤク食べていると、なんだかとても夏をエンジョイしているように。

と。

「むっ…」

ひらり。

視界の隅を、なにか、見知った影が通った、ような。

「ねーちゃん、どうかした?」

急に立ち止まった私に、弟が声をかけてきました。

「あ、ううん、なんでもないよ。行こう
きつと見間違いでしよう。」

もう一度そこに目をやると、ぼけつとしたシカが歩いていました。

お社やしろへの参道の、入り口。

あたりは参拝料を支払う人でごった返しています。今は特に、ツアー御一行様が我先にと進んで行こうとしているので、他の参拝客は待っているしかありません。

「こんなにくさん来るもんなのねえ」

石段に座って呆れていると、弟も同じ意見のようでした。

「うん、今まで、こつちからは来なかつたもんね。すごいや」

海風のおかげで暑さはしのげるものの、こんなに人が居ると疲れてしまいます。

ツアー客の一団は通りすぎたようで、一般の参拝客が支払いを始めました。

「さ、行こつか」

「うん」

「へええ、綺麗なもんねえ」

お社の中はまるで新築………という言い方が正しいのかわかりませんが、とにかく

真新しいです。手すりや柱はつやつやの朱色で、床や天井は綺麗な木目が並んでいます。海の上に建っているのです、ざあ、と打ち寄せる波の音が聞こえるのもまた風情があります。

「台風のために吹き飛ばされてるからね、新築みたいなもんだよ」

弟は風情が無いです。

「宮大工さんも大変ねえ」

「でもさ、そのおかげで技術は鈍らないんじゃないかな」

「あ、なるほど」

ただでさえ宮大工というお仕事は、その技術の使いみちが減ってきていると聞きます。頻繁に修復作業をすることで、腕が錆びないようになっているのでしょうか。

「やっぱ、人多いね」

お社を進んでいくと、ひとときわ人が多いところがありました。

お守りやおみくじ、お賽銭。人々がこぞってそれらに食いついています。

「おみくじとお賽銭くらいはやつとくか」

「うん」

「げ」

「うん？」

おみくじは、末吉でした。

「これ、生殺しよね」

「なにが？」

「だってさ、いつそ凶なら諦めつくし、吉ならまだ希望があるじゃない。何よ、末吉って私の言葉に納得したように頷く功介。

「確かにそうかもね」

「コースケはどうだったの」

「ん、大吉」

「……………」

ひらひらとおみくじを見せてくる弟。それをじいつと見てみると。

「お」

「え、何？」

「ほらこころ、恋愛運」

——— 新たな出会いあり。好機を逃さぬよう。

「やったじゃん、ねえねえ、何のことかなあ、これ？」

「ぐう、見せるんじゃないかった」

「神様のお墨付きまでもらっちゃったんじゃあ、頑張らないとねえ？」

「ええい、そういうねーちゃんのはどうなのさ」

「ん？ えーつとねえ……、悪しき出会いあり、災いに注意……？」

「ぶ」

「ひ、ひどつ……。なによ、これえ」

「ねーちゃん、おみくじはさ、引き直してもいいらしいよ」

「知らないわよ、そんなことつ。えーい、こんなもん、こーしてやるう」

両手でくしゃくしゃとこよりのように細くねじり、壁に結んでおきました。

「よし。うわ、すごい数ね、こころ」

おみくじを結べるよう、棒の掛けられた壁には一面におみくじが括りつけてありました。

「あ、ねーちゃん、お賽銭箱空いたよ」

「よしきた」

ちようどお賽銭箱の前から人が消えていました。

「えーと、にれい、にはくしゆ、にれい、だったわね」

「違うよ、最後は一礼だけだよ」

「あ、そうなんだ。オツケー」

ポケットから五円を取り出し、賽銭箱にぽいっと投げます。
ぱん、ぱん、と、二人分の拍手の音。

(……)縁がありますように)

それだけをお願いして、最後に礼をしました。

お社を抜けて。

鳥居の傍。

写真屋さんの裏。

路樹の影。

シカの群れの中。

おみやげ屋さんの置物の奥。

お蕎麦屋さんの、のぼりの向こう。

「むうう」

ずるずる。

「……う」

ずぞー。

「……………もぐもぐ」

「とん。」

「ねーちゃん、どうしたの。さつきからキョロキョロしっぱなしだよ」

「……………」

ぎるの上を平らげ、蕎麦湯をすすりながら尋ねてくる功介。

「……………その、ね。見間違いだとは、思うんだけどね」

「うん」

ふう、と一息つき、言葉をつなぎます。

「さつきから、いろんなところで、白いシャツに青いジーンズで、でっかいカバン持つてる黒髪ロングの人を見るんだ」

「……………なるほど」

合点がいったように湯のみを持ったまま頷く、次代の当主。

「はあぁー……………もー、ぜーったいあの人だよねえ」

「だろうね。それなら、父さんのメールとか、いろいろ納得がいくもん」

「そう？ とつとと帰って来い、っていうんならわかるけど、なんであたしらをフラフラさせんの？」

「町でばったり遭わせて、なんか面白いことでもしてこいってことじゃないの」

達観したように言う弟。もう既に、当主の貫禄を漂わせています。

「なら入れ知恵したのは母さんね。もう、ヘンなことが好きなんだから」

「そうだね」

母はおっとりしているようでその実しつかりしており、そしていたずらが大好きです。

決して悪質ではなく、むしろ善意に依るいたずらばかりをするのですが、度を過ぎた善意は悪意をも勝るもの。母はその手のいたずらの達人であり、隙あらばその手腕を発揮しようとしています。

今日の一件もそう。きつと、

『まちなかであのひとと出会っちゃったらきつと楽しいワ』

なんていう魂胆でしょう。

「コースケは気づいてなかったの」

私のざるの上にはまだ蕎麦が残っています。こういう観光地のお店はなかなか美味しいお店が多く、ここのお蕎麦屋さんも大当たりでした。

「魔術師っぽい人がいるなあ、とは思ってたけど、ここじやいつものことだから」

「そうねえ」

私のざるにはまだお蕎麦が残っています。

こういう観光地で食べるものはなんであれ、美味しさが増しているように感じます。この蕎麦もまさにそう。なんでもない普通のざるそばのはずなのですけれど、冷たくてとっても美味しいです。

「向こうは気づいてるのかな」

蕎麦をずるずるしていると、弟が言葉をかけてきました。

「気づいてるんなら話しかけてくるでしょ。そのうちバツタリ会っちゃうんじゃない」

「……今年も、橙子さんが帰ったんだね」

「そうでしょうね。まったく、あの姉妹は仲が良いんだか悪いんだか」

「え、良いでしょ」

なんでもないことのように言う弟。

「ばっか、仲が良いってんなら殺し合いなんてするもんですか」

「あのふたりが本気で殺し合ってるんなら、とつくにどっちか死んでるでしょ。意識的であれ無意識的であれ、最後の最後には手を抜いてるんだと思うな」

「ははあ、そういうことか」

ずるり、と最後の一束を口に入れ、もぐもぐしていると。

「あらあ、久しぶりね、貴方たち」

涼しげな声が、りん、と響きました。

十一話 魔法

この島に似合った、古めかしい木の家。

暖簾をくぐる前から「美味しいだろうなあ」と分かるほどに、この蕎麦屋はオーラを持っていた。

横開きの扉を開き、店内へ。

店の中にある机も椅子も、床も天井も、黒い木で造られている。いかにも、な蕎麦屋だ。

愛想のいいおばちゃんにざるそばを二人分注文し、置かれた麦茶を飲む。よく冷えた麦茶は、炎天下を歩き通したこの体に染み渡るようだった。

ほどなくして二人前のざるそばが届いた。

割り箸を両手で割り、まずは葱と山葵をつゆに入れ、混ぜる。蕎麦を箸で掬い、そのつゆと絡め、口へ運ぶ。

「――」
旨い。

よく冷えてはいるが、冷えきっているわけではない。程よく締まった蕎麦は、それで

いて柔らかい。

めんつゆは少し濃い目。それがこの蕎麦と実によく合う。

口から鼻へと湧き上がる、濃い、めんつゆの香り。それに混じる葱の食感と山葵の辛みが、また良い。

ごくり、と嚥下して、反省する。一口目は少しつゆに浸しすぎたかもしれない。この濃さなら、「江戸っ子」の食べ方が合うだろう。

箸で掴んだ蕎麦の下半分だけをつゆにつけ、一口で啜る。

——ああ、これだ。この味だ。

きつとこれが、この蕎麦屋の、このざるそばの本当の味だ。

つゆに負けない、蕎麦の香りを感じられるこの絶妙な濃度。口内を満たす清涼感。

まさにこれこそが——

「……コースケ、ドラマの見過ぎ」

「む」

ずぞぞぞぞ、と姉が大量の蕎麦を吸い込みながら、僕の思索を邪魔した。

「一口食べるのにどれだけ時間かけてんのよ。そのまま店主にアームロックでもかける気か」

「……ドラマだと客にかけてたね、アームロック」

「ああ、カツコ良かったねえ、アレ。かける側もかけられる側も良い演技だったわ」
「ねーちゃんもハマってるじゃん」

「あはは、まーね」
ずるずる。

姉と話しながら食べていると、どうも速度が上がってしまふ。ふと気づくと、ざるの上には、もうあと一口分の蕎麦しか残っていない。

ざるの上で細かく千切れた蕎麦をかき集め、つゆに浸し、食べる。

そんなことを数回繰り返しただけで、本当にざるの上から蕎麦は消えてしまった。

「はあ。なんで蕎麦は食べると無くなっちゃうのかな」

「それと同じセリフ、ドラえもんで聞いたわ、あたし」

姉はまだ半分くらいの蕎麦を残し、少しづつ、つるつると食べている。

姉はどうもモノを食べるのが遅い。特に今日は落ち着きなく、目をキョロキョロさせている。

そんな姉を尻目に、蕎麦湯をめんつゆに注ぎ、ちびりと飲んでみる。

元が濃い目のめんつゆなので、つゆの味が引き立ってこれまた旨い。

旨いが、眼前の姉の挙動がどうしても気にかかる。

「ねーちゃん、どうしたの。さっきからキョロキョロしっぱなしだよ」

姉の挙動不審は今に始まったことではないが、こう間近でキョロキョロされるとこつちまで落ち着かない。

「……………その、ね。見間違いだとは、思うんだけどね」

「うん」

言いにくそうな顔をする姉。それでも目をそらさず見つめていると、観念したように溜息をつき、口を開いた。

「さつきから、いろんなところで、白いシャツに青いジーンズで、でっかいカバン持つてる黒髪ロングの人を見るんだ」

「……………なるほど」

そして、姉が蕎麦を全部食べ終わったころ。

「久しぶりね、あなたたち」

なんていう、はつらつとした声が蕎麦屋に響いた。

顔を向ける。

腰まで伸びた美しい黒髪。旅慣れた服装。その細い体にはアンバランスな、大きな靴。

化粧はなし。けれど、そんなものは必要ないだろう。彼女はそんな余分メイクを付け足さな

くとも、十二分な魅力を持っていた。

「……………はい、お久しぶりです」

去年会ったときと何ら変わらない、蒼崎青子がそこに居た。

「お久しぶりです、青子さん。相変わらずお元気そうですねえ」

箸を置き、姉が青子さんに話しかけた。

「そりゃあもう。二人とも元気そうので安心したわ」

「あれ、心配してくれてたんですか」

心底意外だ、なんて思っていたら、つい口が滑ってしまった。

「あらあら、功介は「元気すぎるみたいね、嬉しいわあ。嬉しいついでに一発、魔弾喰らっ

とく？」 こう、軽く海の間こうまで飛ぶくらい」

「口が滑りました、すみません」

「うむ、素直でよろしい」

「はあ、そういうところ、橙子さんと似てますよね」

「あはは、ブチ抜くわよ」

「すみませんでした」

そんな青子さんと僕のやり取りを、姉はニヤニヤしながら見つめていた。

「なにさ、ねーちゃん」

「ん？ いやあ、やっぱ仲良いなあって」

蕎麦湯を作りながら、しみじみ、なんて言葉が似合いそうな仕草で語っている。

「そうねえ、功介はいい男の子になったわ」

こつちもこつちで、しみじみ語る青子さん。

なんだろう。

なんか、恥ずかしい。

恥ずかしいので、会話の方向を変えてみる。

「……青子さん、お昼は食べたんですか？」

「ん？ さっきそこで食べたところだけど」

指差した先は、姉の真後ろの席だった。

「……気づきませんでした」

「私は気づいたけどねー。えっと、功乃がアームロックかけて欲しいんだっけ」

手をワキワキさせながら、青子さんが姉へにじり寄っていく。

「ち、ちがいますよう。ほら、孤独のグルメってやつで、主人公がアームロックするシーンがあるんです」

姉は必死の形相でそれを拒んでいる。なんか、怪しい絵面だ。

「こどくのぐるめ？ あー、あれってグルメ漫画じゃないの？なんでアームロック？」

「グルメ漫画でもバトルするんですよ」

「なんだか姉が可哀想なので助け舟を出してみろ。」

「ふーん。確かに味皇とか凄かったもんね」

「僕の言葉に、青子さんは納得したようである。」

「ミスター味っ子とは、また世代を感じますねえ」

「今度は姉が余計なことを言っている。」

「世代？ そんなに昔だっけ、あれ」

「そーですねえ、あたしまだ生まれてません」

「は？」

「珍しい。青子さんが目を白黒させている。」

「え、まじ？ えーと、功乃は今年で二十四でしょ、それよりも前って、うわあー……」

「指折り数えながら、頭を抱える魔法使い。」

「いいじゃないですか。よく知りませんが、青子さんにはあんまり時間の概念は意味ないんですよ」

「今度は青子さんを励ましてみる。」

「えー？ いやまあ、そーだけどねえ。死徒ってワケじゃないんだし、ジエネレーションギャップには驚いちゃうわ」

「はあ。死徒でも、ジエネレーションギャップはありそうですね」

「あいつらは世間なんてクソ食らえって連中じゃない。それに比べりや私なんてカワイもんよ」

「……………」

驚いた。

このひとつとは、死徒より魔法使いのほうがカワイイらしい。

「それで、どうしたんですか、青子さん。なんかあたしたちがこの島に着いた頃から、近くに居ませんでした？」

姉がそれとなく本題を話し始める。

「んーっとね、他所様のキョウダイってのはどんな感じなのかなーって、観察してた」

「……………」

絶句。

「えー、あたしらなんか見てて面白いです？」

対して、姉は動じていない。ストーカーまがいのことをされておいてこの態度を取れるとは、流石である。

「面白いわよお。なんか姉貴は変わった兄妹とつ捕まえたみたいでさ。今どーなってるんだか知らないけど、やっぱ姉と弟、とか、兄と妹ってのはおもしろいわ」

「まあ、確かに僕ら、青子さんたちよりは仲良いですけど」
「でしようね。じゃなきや同居なんて無理だわ」

「はは、青子さんと橙子さんが一緒に暮らしてたら、街がひとつ消えますね」
「そーね、試してみましようか」

笑顔で右手をかざす青子さん。また口が滑ってしまった。

「あ、あの、ほら、外出ましよう、外」

「ん？ 表出ろつて？」

「ち、ちがいますつ。せつかくこんなところまで来たんですし、観光しましようよ」
「そうですね。お昼食べたんなら、どっか遊びに行きましよう」

僕の提案に姉も乗っかってきた。

「じゃ、潮干狩りをしましよう」

「へ？」

「へ？」

そんな姉と、声が重なった。

「なんでそんなもの」

「持つてるんですか」

姉と声を揃える。

会計を済まし、意気揚々と砂浜へ邁進する青子さんの手には、陽の光で輝く銀の熊手が握られていた。

「ここで貝やらエビやら獲るのが好きでねー。ここに来るときはゼツタイ道具持つてるの。あ、人数分あるから心配しないでね」

ぽんぽん、と鞆を叩きながら、満面の笑みを浮かべる青子さん。

「はあ。四次元ポケットか何かですか、それ」

「あー、近いかもね」

「……………」

なんでもないように言うけれども、それを冗談だと笑って飛ばせないのがこのひとの恐ろしいところである。青子さんなら四次元ポケットのひとつやふたつ、持っていてもおかしくない。

堤防にさしかかり、青子さんの足が止まった。

「うんうん、いい感じに引いてるわね」

ちようど干潮の時間らしく、ずいぶんと潮が引いていた。広大な浜辺では、既に数十人のお年寄りがかもりもりと潮干狩りを実行し、浜辺に埋まる貝という貝を掘り出している。

「貴方達、潮干狩りくらいはやったことあるでしょう?」

青子さんは腰に手を当て仁王立ちしている。その姿勢のまま、首だけをこちらに向けて尋ねてきた。

「僕はまあ、小さい頃に何度か」

「あたしは、ないです」

「あら、そうなの? せっかく島育ちなのに、もったいないわね」

「……海、嫌いですから」

口を尖らせて、姉が言った。

「……それは、どうして?」

そんな姉に、青子さんは優しげに問いかけた。

「それは、その。……ちっちゃい頃からいつも身近にありすぎて、潮の匂いとか、海の色とか、苦手、なんです」

青子さんは澄んだ目で姉を見据える。その目を直視しないよう、姉は目を逸らす。

「ふうん。それは仕方のないことかもしれないけどね。でも、今はどう?」

「え」

僕の隣で、きよとん、とした顔を浮かべる姉。

「……………まあ、その。悪くは、ない、です」

「うん、そうですね」

姉のその言葉に、青子さんは顔をほころばせた。

「結局人間っていうのはね、自分の根っこに戻ってくる生き物なの。どんなにそれが嫌いなことでも、どんなにそれが辛いことでも、ヒトは皆、根源へと戻りたがる。きつと人間っていうのは、そういうふうに出てくるんでしょね」

「そんなもの、ですかね」

「そんなものよ。古巣が一番のこと。……さ、潮干狩り、しましよ」

青子さんは未だ嫌そうな顔を浮かべる姉を無視し、それどころか手を取って浜辺へ邁進し始めた。

姉は引きずられながらぶつぶつと文句を言っているが、抵抗する気はないようである。それを確認し、二人のあとを追う。

——さっきの青子さんの言葉は、なんとなく、青子さんらしくない気がした。

このひとは戻るべき場所より、進むべき場所を重視するひとだと思っていたのだ。

昨日よりも明日を。

此処よりも此先を。

過去よりも未来を。

そういう、未だ見ぬ明日を楽しむひとだと思っていた。

「何か、あつたのかな」

どうせ、訊いたところで、何も教えてはくれないだろうけれど。

なにせ、それ以外の点では、この魔法使いは何一つ変わっていない。

纏う空気も、紡ぐ言葉も、その足取りも。

一年前に会ったときから、いや、それよりもずっとまえから。

彼女は既に完成された魔術師のようでもあり、それでいてまだ発展の余地はあるようでもある。けれど、当の本人がこれ以上発展しようとしていない。

無限の可能性を持っているようで、自らの限界を見据えているのか。

数多の過去を識ることで、其の先すらも識ってしまったのか。

魔法というものは、それほどまでに重いのか。

「おうい、功介。置いていくぞう」

青子さんの声で我に返ると、彼女は左手に姉の手を持ったまま、右手に持った熊手をぶんぶんとしていた。

「危ないですよ、青子さん」

そう言うと、何故か彼女は口を尖らせた。

「ねえ、名前で呼ぶの、やめてくれないかなあ」

「へ? ……ああ、そうでしたね」

青子さんは、「ああああ」と続く自身の名前を嫌っている。なので、「青子」と呼ばれるのが嫌いなのだそうだ。

「それじゃあ、なんて呼べばいいんです」

「んー？ そうねえ、何がいいかしらねえ」

「ずんずんと砂浜を進みながら思案する青子さん。しずしずと続く姉は、だんまりを決め込んでいる。

「……いつだったか。先生、なんて呼ばれたこともあつたっけ」

ふと思いついたように、彼女は言った。

「先生、ですか」

「そう、先生」

空を眺め、懐かしむような顔を浮かべる。

これもなんとなく、青子さんらしくない、気がする。

「それはなんか、抵抗があります」

「でしょうね。まあ、別に青子でもいいかな。そんなことにまで目くじら立ててたら、キリがないものね」

「……………はい」

「青子さん」

がっしやがっしや。

「ん？ どうかした、功乃」

ぎっくぎっく。

「いえ、その。青子さんは、潮干狩りが得意なものだと思っていました」

ばしやばしや。

「私、得意だーなんて言っただけ」

ぼりぼり。

「いえ……」

さくさく。

「いわゆる下手の横好きってヤツね。別に山程獲ったところで食べられやしないし、こ
うやって土を掘ってるだけで楽しいのよ」

ずり、ずり。

「そういうものですか」

じゃかじゃか。

「そういうものです。………お、あつた」

ぼちやん。

潮干狩りによって得た戦利品を片手に、家路を歩く。

右手のポリ袋の中には、あさりのようなものが五つ、小エビっぽいものが三匹か四匹。

青子さんはこのあさりのようなものを二つ獲り、後は全部僕が掘り当てたものだ。

「あー、楽しかった」

「それは、なにより、です」

青子さんは満足気で、姉は満身創痍といったところ。

別に体に傷を負ったわけではないけれど、主に精神面で疲れたようである。

「姉ちゃん、大丈夫?」

「うん、ちよつと、潮の匂いにやられただけ」

声色とは裏腹に、顔色は悪くない。ただ疲れただけのようだ。

「トーコさんはやらなさそうですね、潮干狩り」

「やれやれ、なんて続きそうな声で姉が話す。」

「ゼツタイやんないわね。魔術品が埋まつてる、なんて言ったらやりそうだけど」

「浜辺に埋まる魔術品、ですか。なんか、ありそうですね」

「ロマンチックでしょう」

「メッセージボトルみたいです」

「お、いい例えね功乃。うん、今度潮干狩りやるときは、宝探しもやろうかしら」
「あはは」

笑う姉。

姉は、海が嫌いだったはずである。

けれども。

「また、やりましょうね、功乃」

「はい、青子さん」

どうも、克服できたらしい。

十二話 see you again, miss blue!

青子さんと並び、実家への道を歩きます。

実家は山の中。自然とそこへの道も山の中で、夕暮れの日差しを受けて木の葉が煌めいています。

前には弟。いつもの通り、少し猫背気味で自信のなさ気な歩き方をしています。

ふと、毎年行われているという蒼崎家デスマッチIN宮本家のことを思い出しました。

「そういえば、今年は青子さんが残られたんですね」

「え？ ああ、そうそう。今年は私が勝ちました。いやー、ハンディで体術と刻印ナシで戦ってんだけど、それでも勝っちゃうのよねえ」

「こ、刻印って、魔術刻印ですか……？」

「うん」

さらりと答えるミス・ブルー。

でも、魔術刻印を使わずしてあのトーコさんに勝つなんて、一体全体どうやれば可能

なのでしよう。

「それ、どうやって勝ったんです」

先を行く功介が私の疑問を代弁しました。

「むふふ、そりゃー企業秘密よ。聞いたら最後、時空の果てまで吹っ飛んじやうんだから」

「……………」

「……………」

トーコさんといい青子さんといい、冗談が冗談だと思えないので怖いです。

「……………橙子さん、実家に来る前に平屋のほうにいらしたんですけど、アレ結構前じゃなかったですか？ 確か、二週間くらい前だったような」

「そうそう。三日くらいで私帰っちゃったんだけど、帰り際に奈津江さんから『功乃の誕生日が近いんです』って聞いちゃって。で、今日また来ちゃった」

てへ、なんて顔をして額に手をやる青子さん。四十すぎとは思えない愛らしさです。

「わざわざありがとうございます、青子さん」

青子さんは何かと忙しいお方です。そんな人がわざわざ私の誕生日のために来てくれたなんて、我が人生に悔いが残らなくなるレベルで嬉しいです。

「いーっていーって。誕生日ってさ、普通の記念日と違って、その人が生まれてから死ぬ

まで同じ日なのに、人間一人一人日付が違うっていう特殊なものでしょ？ 大事な日だ
と思うの、私」

「なんだか今日の青子さんはやけにムツカシイお話をされております。

「着きましたよ、青子さん」

と、気づくと宮本家の門前でございました。

「よし、入っちゃおう」

門を抜け、がらがらと玄関を開ける青子さん。

「只今戻りましたあ」

「帰ったよう」

「ただいまー」

三者三様の挨拶。それを母が出迎えてくれました。

「三人とも、おかえりなさい。あら、功介、それは？」

功介の持つ泥だらけのビニール袋を見て、母が怪訝な顔をしています。

「三人で潮干狩りをやったんだよ。大したもの獲れなかったけど、一応持って帰ってきた。はい」

受け取ったビニール袋の中身を見て、母が笑みをこぼしました。

「功介がお父さんと潮干狩りに行ったときも、これくらいしか獲れてなかったわね」

「そうだったっけ」

「ええ。それじゃあ、晩御飯のおかずの足しにでもしましょうかしらね。ほら、三人とも手を洗って、居間に行つてらっしゃい」

「うん」

「はい」

「お邪魔しまーす」

「只今戻りました、平介さん」

居間のふすまを開け、中にいる父に挨拶する青子さん。

「おかえりなさい、青子さん。功介と功乃も、おかえり」

平屋とは比べ物にならないサイズの居間の真ん中には、これまた平屋とは比べ物にならないサイズの木の長机がでん、と置かれています。父はその一番奥に座っていました。

「ただいま、父さん」

「ただいまあ」

青子さんがテーブルの右側に、功介がそれに向かい合うように座り、私もその隣に正座します。

「功乃、誕生日おめでとう。これ、橙子さんから預かりものだ」

斜め前に座る父が、畳からひよいと何かを拾い上げ、机に置きました。

「トーコさんから?」

白い包装紙に包まれた、手のひら大の長細い立方体。それに綺麗なオレンジのリボンが巻かれています。

「うん。なんでも、参考にしてくれ、だそうだ」

「……?」

よくわからず、とりあえず開けて見ることにしました。青子さんと功介も、関心の目を向けてきています。

ぴりぴりと包装紙を解いてみると、今度は黒い箱が出てきました。

ぱかり、と開けてみると。

「お?」

「えっ」

「ほう」

ちよこん、と、楕円形のレンズをした眼鏡が在りました。

「こ、これって……」

まさかと思い、その眼鏡を掛けてみますと、

「ひゃっ」

ずきり、とこめかみに軽い痛みが走りました。

間違いありません。

「これ、トーコさんの、魔眼殺しだ……」

眼鏡を外し、しげしげと観察してみます。

「凄いもの貰っちゃったね、姉ちゃん」

「う、うん。でも、これ、貰っていいのかな……」

見た目は普通の眼鏡です。レンズの材質が特殊なのでしょう。

「いーんじゃない？ 私も姉貴からパチったことあるし」

「ぶっ……」

さらりと爆弾発言をかます青子さん。そして、それに噴き出す功介。

「青子さん、なんでそんな自殺行為を」

「ひーみーっっ」

功介の問いに、青子さんは唇に人差し指を立ててウインクを返しています。青子さんレベルの女性でなければ出来ない仕事です。

「で、どうだ。参考にはなりそうか」

父は私がトーコさんの眼鏡を再現しようとしたことを知っています。その上での質

問でしょう。

「どーだろ……。これ、あたしにはちよつとキツイんだよね」

あたしの浄眼はとつても低ランクのもの。なので、さつきは魔眼殺しの力に負けて、逆に眼球が悲鳴を上げてしまいました。

「だらうな。まあ、気長にやってみなさい」

「うん」

「これはこれで、たからものです。」

「そうそう、私からも、これ」

青子さんも、大きな鞆から引つ張りだした何かを手渡してくれました。

「わあ」

それは、綺麗な貝殻のネックレスでした。

「こーいうの自分で買わないからなー、どう？」

「はい、たいへん気に入りました。ありがとうございますっ」

早速わしゃわしゃと首につけてみました。

「お、似合うわねえ」

青子さんはそう言ってくれますが、この部屋には鏡が無いので確認のしようがありません。

「むむ、あとで確認します」

「うん。気に入ってくれて良かったわ」

夕食は母の手による洋食フルコースでした。功介といい、私の好みは完全に把握されています。

ちなみに、潮干狩りの獲物はグラタンに混ぜてあった、らしいです。

「ふう、ご馳走様でした、奈津江さん」

「お粗末さまでした、青子さん」

ときばきと食器を片付けていく母。この手際の良さは、まだ私も功介も真似できません。

「そうだ、功介」

「ん？」

何かを思い出したように、父が功介に話しかけました。

「ルーンの出来はどうだ」

「ああ」

そういえば、功介が私に「ルーンを教える」なんて言ってきたこともありましたが。あれは確か梅雨の前、六月の頭ごろでした。結局あれから一度も功介は私にルーンのこと

を訊いてきませんでした。

「そーよ、分かんないことあつたら聞けつて言つたのに、コイツなーんにも聞いてこなかつたのよ」

左手で功介の頭をぐりぐりやつてみると、功介がふくれつ面を浮かべました。

「むう、一応基礎は出来たよう。加護トウレルとか防御エオロのルーンなら完璧だし」

「ほう、言うわね功介。私の魔弾に耐えられるかな?」

むふふ、なんて笑みを浮かべる青子さんに、功介はけろりとした顔で返事をしました。

「うーん、シングルアクション一工程なら十発くらいまで耐えられると思いますよ」

「げ」

なんとということを使うのでしよう、この愚弟グツテイは。

「よっしや、じゃあ食後の運動つてことで、ひとつやつてみますか」

青子さんはノリノリです。

「それでは、地下室へ行きましょう。あそこであれば問題はないでしょう。涼しいですし」

「あらあら、面白そうね。わたしも見学させていただきます」

それに乗つかる父と母。

三人はふふふ、わはは、おほほ、なんて笑い合っています。これだから魔術師という

のは怖いのです。

「コースケ、ホントに大丈夫？」

ちよつと心配になってしまったので、こつそり耳打ちしてみました。

「多分」

「多分つて、あんた……」

青子さんの魔弾をまともに喰らったら冗談抜きで命に関わります。

「……………まあ、コースケがそう言うんなら大丈夫か」

「うん」

それでも、功介は「守護」の宮本家、次代の当主です。その功介が大丈夫だと言うのですから、大丈夫なのでしょう。

「では、行きましようか」

よいせ、なんて掛け声で立ち上がる父。それに続き、居間の人間がぞろぞろと地下室へ移動を始めました。

私は知らなかったのですが、最初の青子さんとトーコさんの喧嘩以来、この地下室を開放しているのだそうです。

父の先代の当主、つまり私のお爺ちゃんの世代で既に使われなくなったという、コン

クリートで固められた地下室は、それはそれは強固な結界が施されています。物理的にも魔術的にも、地下室というのはまさに結界の中の結界。それを「守護」を特性に持つ宮本家が扱うのですから、その頑強さは折り紙つきです。

ただ、それだけ頑強な結界を維持するのはこれまたタイヘン、ということでお爺ちゃんとは地下室の管理を放棄したのだとか。実際、地下室はただの実験場であり、我が家の正式な工房は離れにありますから、維持する必要がなかったのも確かです。

その地下室の存在を思い出した父は、壊れた結界を功介とともに全面的にリファインし現代風にアレンジ、ついでに功介の霧散の術を簡易的に展開し、地下室の四隅に魔力が集まりやすいようにしてあるんだそうです。

「知らなかったあ」

「おまえはなかなかこっちに帰ってこなかったからな、仕方ない」

父にそう言われるとなんだか申し訳なくなってしまう。

「で、ここならトーコさんと青子さんは全力で戦っちゃえるんですか」

かつかつと地下室の階段を降りながら、先を行く青子さんに訪ねてみました。

「んー、さすがに私が全力出したらヤバイと思うけど、まあ全力の私に耐えられる結界なんてそうそう無いわよ」

「それでしような、は、ははは」

父が乾いた笑いをあげています。

「まあ私も姉貴も本気で殺しあうつもりはないけど、それでもここは頑丈ね。あの離れのときも思ってたんだけど、流星は守護の家つてとこかしら。キックくらいじゃびくともしないわ」

コンコン、と階段をタツプする青子さん。青子さんは魔弾だけでなく、体術もそれこそ魔法級だと聞いたことがあります。まあ実際魔法使いなので、魔法級もなにも無い気がしますが、それに耐えるというのは凄いことなのでしょう。

「よし、準備はいいわね、功介」

「ええ、いつでも」

薄暗い地下室の真ん中に、功介と青子さんが三メートルほどの距離を挟んで対峙しています。

万が一に備えて、両親と私は功介の後ろ、部屋の隅に陣取り、地下室の結界に魔力を注いでいます。

「ほほう」

功介の霧散の術というのは、確かに効いているようです。なんだか、魔力の巡り具合がいつもより良いです。

うずくまり、両手を陣に添えて結界を維持します。相当大規模な結界のようで、ただ維持するだけでもモリモリ魔力が消費されていきます。

「じゃ、行くわよ。構えなさい功介」

「……………」

右腕をかざす青子さん。

左手をかざす功介。

——なんとなく。

青子さんとトーコさんの姉妹喧嘩も、こんな光景なんだろうな、なんて考えが、頭をよぎりました。

青子さんの右腕が、うつすらと蒼い光を帯びてきました。

それを見た功介が、先んじてルーンを刻みます。

「エイワズ退去、エオロー防御、イングズ相乗……………」

すると慣れた手つきでルーンを中空に刻む功介。

イングズのルーンを刻んだ瞬間に、ぱきん、と音を立てて、功介をすっぽり覆うほど大きく分厚い、紺碧の盾が現れました。

「綺麗……………」

楕円形の、レンズのような大きな壁。功介の眼前に現れたそれは、私から見れば口

ケットランチャーにも耐えそうなほどの立派な盾です。

「えー、功介、シングルアクシヨンじゃなきゃ駄目ー？」

右腕を光らせたまま、唇をとがらせる青子さん。

「だ、だめですつ。殺す気ですかっ」

左手をふるふると震えさせたまま答える功介。さすがに、長時間維持するのはきついようです。

「しゃーない、じゃ、行つくわよーっ」

青子さんの右腕がひときわ激しく輝き、掲げた手のひらの先に魔法陣が展開され、青い閃光が紺碧の盾へ放たれました。

「きゃっ」

ばがん、という、破裂とも炸裂とも取れない音が地下室を震わせます。その余波でこちらの体がびりびりするほどの威力。

「こ、コースケ……っ」

怖がつて目を閉じている場合ではありません。こんなバカみたいな威力、あの弟が耐えられるわけがないのです。

「んっ」

なんか呼んだ？　なんて顔でちらりとこちらを見る弟。よく見れば、ルーンの盾には

一つの傷もなく、功介の顔にも一滴の汗すらありません。

「むう、流石に堅いわねえ。ええい、魔弾、展開っ」

右腕を振るう青子さん、その軌跡を示すように先ほどの魔法陣が中空に展開されま
す。

さつきと違うのは、横並びに幾つもの陣が並んでいるということ。

「まづっ……」

これはこつちの身まで危ないです。慌てて急ごしらえの加護トワイの盾ルを、自分の目の前に
展開しました。

それと同時に、青子さんの周囲から一斉に放たれる青の魔弾。

ずががが、と、戦争映画の効果音のような音が立ち、その衝撃波は私のトゥールの
盾を粉々にしてしまいました。

「う、わー……」

それでも功介の盾は無傷です。

「えー、何よその盾。どーなってるの」

むー、と口をとがらせる青子さん。

「ふふふ、企業秘密ですよ、青子さん」

してやったり、なんて顔をする功介。

なんて馬鹿な弟。青子さんにあんな顔をしたら――

「よしお姉ちゃんドロウ二工程撃つちゃうぞー」

笑顔でそんなことを言う魔法使い。目の錯覚か、額に青筋が立っているように見えません。

青子さんの右腕が、更に強い青色を放ち始めました。がきん、と、右腕を中心に大きな魔法陣が展開されています。

「あ、青子さん、それはヤバイですってっ」

私の制止の声は届きません。

「さっきまでのはお遊びよ、功介。マジックガンナーの異名、その身に刻みなさいっ」

これはもう、こっちも覚悟を決めるしかないようです。部屋の結界は父と母が維持してくれているので、結界への魔力をほとんどカットし、トゥールのルーンを刻み直します。

「うっ」

一瞬の閃光の後、爆音が体中を振動させました。

先程までの魔弾とは比べ物にならない一撃。まるで大砲のような魔弾。地下室が軋みをあげ、結界は悲鳴をあげ、私の渾身のトゥールはやつぱり粉々になりました。

もはや何物にも例えられぬ轟音のあと。からから、と、天井のコンクリート片が落ち

る音が続きます。

「へーえ……」

青子さんは、ナニヤラ満足気な顔を浮かべています。

魔弾が掠めたのか、青子さんと功介との間の床が大きく抉られていました。

が、功介のルーンの盾は健在です。大きなヒビがひとつ、真ん中から外側に向かって

走っていますが、肝心の術者である功介にはかすり傷ひとつついていないようです。

「うん、上出来上出来。スナップはともかく、ドロウまで防ぐんなら大したもんだわ。専門外のくせに、よくもまあここまで使いこなすわね」

右手を下ろし、これ以上はやりません、なんて顔をする青子さん。

「あ、ありがとう、ございます……」

はあ、と大きな溜息をつく功介。見れば、だらだらと大量の汗をかいています。

功介が左手を下げると、紺碧の盾はまるで霧のように散っていききました。

「いやあ、よくやった功介。ここまでやるとは思わなんだ」

父がヨロヨロと立ち上がり、功介の背中を叩いています。

「それは青子さんに言っただけよ。刻印使うなんてひどいですよ」

「えへへ」

褒めてもないのに照れ笑いをする青子さん。

「まあまあ、青子さんも全力ではなかったのだから。それにしても、結界は張り直さないとダメですね」

母は壁をペタペタと触っています。

床が抉れたということは、その結界が破られたということです。

「あちゃあ、あたし、魔力切っちゃったからなあ」

「ああ、構わないよ功乃。父さんたちも身を守るので精一杯だったんだから」

わはは、と笑う父。見れば、父と母の居た場所にも魔力の残滓がありました。各々、自分用の防御の結界を張っていたようです。

「そうね、魔術やってないって聞いてたから、功乃がルーン使ったのにはびっくりしたわ。案外やるじゃない」

「ど、どうも」

褒められるのは嬉しいですが、私が防ぐことが出来たのは青子さんの魔弾の余波だけです。それも、功介の「霧散の術」とやらで、魔力のバックアップを受けた状態で。

「ごめん姉ちゃん、青子さんがここまでやるんなら、もうちよつと大きい盾作ればよかったですね」

「ばか、そんなの出しても維持できないでしょ」

「あはは、そうかも」

功介が私にルーンの使い方を訊いてこなかったのは、研鑽をやめていたのではなく、わからないことが無かったからなのだ、今更理解しました。

「よし、じゃあ私はそろそろお暇いとましようかな」

ぱんぱん、とジーンズをはたきながら青子さんが言いました。

「いやあ青子さん、お忙しいところをわざわざありがとうございます」

「いえいえ、お気になさらず。功介の成長も見れたし、私も満足ですよ、平介さんと、青子さんが私の方に歩いてきました。」

「じゃあね、功乃。魔術はともかく、人生これからなんだから、頑張んなさいよ」
そう言って、わしやわしやと私の頭を撫でてくれました。

「は、はいっ」

ひとしきり私の頭を撫で回したあと。

「それじゃあ皆さん、お元気で」

鞆を手に、右手をぶんぶん振りながら、暴れん坊の青子さんは帰って行きました。